
ベルの狩猟日記 4

P 琢磨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベルの狩猟日記 4

【Nコード】

N8284F

【作者名】

P 琢磨

【あらすじ】

この物語はモンスターハンターのファンフィクションです。【ベルの狩猟日記】シリーズ第四話に当たる作品なので、先に【ベルの狩猟日記】シリーズに目を通して頂けると幸いです。拙い部分も多いと思いますが、最後までお楽しみ頂けたら幸いですー（・ー・）

01・暇潰しのお話会（前書き）

何はともあれ、あけましておめでとunggございます!!

初めての方、いないとは思いますが、はじめまして。

【ベルの狩獵日記】シリーズご愛読者の皆様、お待たせしました、新作です。

今回も前話同様、毎日更新していきたいと考えているので、最後までお付き合い頂けたら幸いですー（・ー・）ー
感想や指摘など、お待ちしております！

01・暇潰しのお話会

人里離れた場所に忽然と姿を現す村——ラウト村。

そこには現在、三人の^{ハンター}獵人が専属で雇われている。三人が専属獵人として狩獵を始めて、^{かれこれ}彼は半年が経過しようとする現在、ラウト村の周囲にあった脅威は薄れつつあった。

「……それにしても、村人が増える気配は皆無よねえ……」

ふう、と遠い目で嘆息するのは、ラウト村専属の獵人である少女——ベルフィークことベルである。

今日も朝から農場の手入れを行い、昼近くに酒場を訪れると、早めの昼食を摂っていた。長卓に並んでいる料理は、ホタテチップとジャリライスに粉吹きチーズを塗^{まぶ}したリゾット。おつまみにヤングポテトのフライが付いている。

服装は淡い黄色のブラウスに、白色のスカートと言う私服姿で、獵人である事を差し引けば歳相応の少女に映るベルは、ヤングポテトのフライを摘みながら、疲れた訳でもないのにため息を零す。澄んだ青い双眸には愁いの色が滲んでいる。

「はあ……お金が欲しい……」

ポツリと漏れた言葉を、真向かいに座っていた少年が耳聴く聞きつける。

少年もラウト村専属の獵人であり、ベルの仲間である。名をフォアンと言い、ベルとはラウト村で知り合った仲だ。^{しっか}確りしているように、間が抜けているようで……何とも掴みどころの無い男ではあるが、やる時はやる獵人なので、狩獵に関してはベルも全幅の信頼を寄せている。

今は青色のノースリーブに、黒色のスラックスと、ベル同様私服姿で昼食を口になっている。並んでいる料理はたった一品。ガブリルロースのステーキだけだ。それが何故か三つ並べられ、その内二皿は既にフォアンの腹の中に納まっている。

「最近、大型モンスターを狩猟してないしなあ。でも、お金には余裕があるんじゃないのか？ 特産品を採取したり、小型モンスターの間引きをちよくちよくしてるし」

ラウト村は手付かずの自然に囲まれている。すぐ傍に大きな街で“森丘”と呼ばれる狩場が

あり、そこからランポスと呼ばれる小型のモンスターが迷い込んで来る事があるが、最近に至ってはそれも減少傾向にある。

獵人を一手に管理している組合、ハンターズギルドは大型モンスター……飛竜などの巨大なモンスターの狩猟を獵人に依頼しているが、何もモンスターを絶滅させると公言している訳ではない。自然との共存……それが望むべく姿であり、それ以上は人間の傲慢と言わざるを得ない、と言うのがギルドの見解である。

故に、ハンターズギルドに限らず、一獵人としても、モンスターを絶滅に至らせる程に乱獲……或いは規定の量以上のモンスターの狩猟——密獵を看過する事は出来ない。

森丘はランポスの繁殖地であるため、間引きを行い過ぎると、その地限定ではあるが、ランポスと言う種が消失してしまう恐れがある。それは種の絶滅だけでなく、自然界の均衡の崩壊をも意味する。だからこそ間引きは適度にしか行えないのだが……それにしたつて、ある程度行えば、必要は無くなる。

——有体に言えば、ラウト村は現在、平和の只中であつた。

フォアの言う、特産品の採取、更に小型モンスターの間引きを行つた際に生じる報酬は、確かにベルも受け取っている。……だが、……確かにお金は確実に増えてるわよ？ でもさ、こんなんじゃない気がするのよ……ほら、街にいた時とかに聞いた事、無い？ 古龍つてモンスターが存在するらしいじゃない」

「ああ——、飛竜よりも何十倍も長生きするつて言うモンスターだろ？ 何でも、飛竜の生きる祖先だとか」

「そんなモンスターに襲われそうになつた村があつたら、流石にあたし達の手に負えないでしょ？ そういう時、たくさんの獵人を呼

ばなくちゃいけない……ギルドですら手が出せないなら、あたし達が助けを乞うしかないじゃない」

まさか今すぐそんな危機が訪れるとは思えないが、その現実は何ル達が金を稼ぐのを待っていてくれる訳ではない。もしかしたら一年後に訪れるかも知れないし、或いは明日にも——と言う事だつて、あり得ない話ではないのだから。

ベルがお金に執着するのは、今の話に帰結する。

“人を救うには、獵人の助けがいる。獵人に助けを乞うには、お金が必要である”

単純な方程式だ。それを実践するために、ベルは金を稼ぐ事だけに無心する。自分のように——お金が足りなかったばかりに村が滅ぼされたりするような事が無いように、ベルは金を稼ぎ続ける。

「古龍か……古龍を狩猟するとなったら、師匠を呼んでも難しそうだにや……」

ふと、ベルの隣に腰掛けていた、三人目の獵人が口を開く。

三人目の獵人は、二人の獵人に比べるとあまりに毛色が違っていた。寧ろおかしいと言ってもいい。

服装、と言うのは些か間違っている気もするが、その獵人が身に纏っているのは、防具を纏う際に付けるインナーのみで、下着と言っても差し支えないような格好である。更に頭には大きなネコの被り物を被っており、素顔は見えない。

ある種の威圧感を場に振り撒く姿の少女の名は——ザレア。ラウト村専属の獵人で、フォアン同様、出逢いはラウト村である。

彼女には幾つもの謎があり、色々と考えたくなる人物なのだが……

……それも今ではあまり気にならなくなってきた。

……いや、実は今でも気になってるんだけどね……

心の中で乾いた笑みを浮かべ「あははー」と笑うベル。

「——師匠か。あたしの師匠はもう歳だから、狩猟は出来ないかもね」

ベルはリゾットを口に運びながら昔を思い出すように視線を上

向ける。

目に浮かぶのは——セクハラで訴えきれない程に度し難い所業の数々だった。

「そういえば、ベルの狩猟の師匠って、どんな奴だったんだ？」

フォアンは三皿目のステーキを腹に納めると、満足気に腹を摩りながらベルに視線を向ける。フォアンの視線と問いかけに気づくと、ベルに苦笑が滲んだ。

「あたしの師匠？ ただのエロジジイだったわ」

「エロジジイに獵人としての基礎を教わったのか……中々に興味深そうな話だな」

真剣にベルの瞳を覗き込むフォアンに、ベルは更に苦笑の度合いを強め、手をヒラヒラと振りながら応じる。

「興味深いも何も無いわよ。それに、獵人としてはちゃんとした人だったしね。——それよりも、あたしはザレアの師匠の方が気になるわ。そっちの話を聞かせてよっ」

「オイラの師匠かにや？」

ザレアはネコの被り物——アイルーフェイクを左右にコックリコックリ揺らしていたが、やがて動きを止めると、腕を組んで唸り始めた。

「オイラの師匠は素晴らし過ぎて、どこから語ればいいのか、とても悩むのにや……」

「……うん、まあ聞くまでも無く、凄まじい獵人だろうとは、前から聞いてた話を統合すると分かるんだけど……」ザレアに爆弾狩獵を叩き込む程である、とてもではないが尋常な獵人でない事は分かる。「じゃあさ、出逢いは？　どうやって知り合ったのよ？」

「にゃ！」ぴんつ、とアイルーフェイクの頭の上に感嘆符が点った。「出逢いは衝撃的だったのにや！　忘れもしないにや……あれは三年前の事だったにや……」

ぽややーんと何か思考の海に潜った様子のザレア。そのアイルーフェイクへ向けて「おーい」とフォアンが声を掛けても反応無

し。ベルがすぱーんっ、と思いつき叩くと、アイルーフェイスが振り子のように揺れ、ゆっくりとした動きでベルに顔が向けられる。

「——痛いにや！」手を振り回して怒るザレア。

「ごめんごめん。——てか、あんたのツツコミを久し振りに聞いた気がするわ。——じゃなくて、物思いに耽^{ふけ}るんじゃないわよ、聞かせてくれない？ 考えてるだけじゃ伝わらないわよ」

「そうなのかにや？ こういう時って大概【——三年前、ザレアは——】って感じで話が始まっていくにや？」

「ザレアは本の見過ぎだよ。ベルは特別なさ」

「何の話が全く分かんないんだけど？」小首を傾げるベル。

「にやにやつ、じゃあオイラと師匠の出逢った話を聞かせてあげるにや。——あれは、三年前の晴れた日だったにや——」

01・暇潰しのお話会（後書き）

回想シーンに入るのは現実的にあり得ませんよねw
話して貰わないと分からないし、話程度じゃ絶対に過去は伝わらないと思うのは私だけ？

次話“ザレアの師匠”・・・お楽しみに♪

02・ザレアの師匠

「三年前のオイラは引きこもりだったのにや。部屋に閉じこもってずっとゴロゴロしていたのにや」

載っていた料理が空になった皿が、お手伝いのアイルー、白毛のクロに因って下げられた長卓^{テーブル}で、ザレアの昔話が始まる。

「ザレアって引きこもりだったの……？　しかも三年前まで！？　三年でリオレイアを五十頭も狩猟できるスーパー^{ハンター}獵人に大変身しちゃったってこと！？」

がたーっ、と椅子を蹴倒して立ち上がるベル。ザレアは突然の出来事にビクビクと怯えた様子で　アイルーフェイク　の頭に手を載せて震えだす。

「まあ落ち着けよベル。俺もビクリして今食べた肉を全部吐き出しそうだけどさ」

「あんたこそ落ち着きなさいよ！？　絶対吐き出さないでよ！？　あたしまで吐きそうになるから！！」

「あの……話を続けてもいいかにな……？」　怖^おず怖ずと手を挙げるザレア。

「あ、ごめん。どうぞ」　ベルが再び椅子に腰を落ち着かせる。

「えっと……にやほんっ、」　不思議な咳払いをするザレア。「――三年前のオイラは、部屋ですっつとゴロゴロしている引きこもりだったのにや。それがある日突然、爆破されたのにや」

ものすごい、間。

まるで酒場が真っ白になったような空白の時間の後、ベルがよく分かってない風に小首を傾げる。目が点になっていた。

「……えーっと、ある日突然……爆破された？　――テロ！？　ザレアの家で爆破テロが起こったの！？」

「違うぜベル。きつとザレアが爆破されたんだ」

「ザレアが木っ端微塵！？　いやいや違うでしょ！？　あんたいき

なりエグい事言わないでよ！！ 夢に出てきそうじゃない！！」

「爆破テロじゃないのにや！ 師匠がオイラの部屋を爆破したのにや！！」

更に酒場が真っ白になるような間。

「——それは爆破テロじゃないの！？ つかあんたの師匠は何を考えてたの！？ 引きこもりの子の部屋を爆破！？ それが獵人のする事なの！？」

あまりに現実離れしていて、話が全く掴めないベル。頭の上に疑問符をしこたま浮かべて、更には瞳さえもが疑問符の形になってしまっている。

フォアンが腕を組み、難しそうな顔で呟く。

「引きこもりに対する斬新な接し方だな」

「そんな次元！？ 一歩間違えれば殺人よ！？ いやもう器物損壊とかそんな次元でもない気がするわ！！ これは歴^{れっき}としたテロよ！！」

「師匠はそんな酷い事はしないにや！！ 部屋の爆破は…… オイラを改心するための、荒療治なのにな！！」

「程があるわア！！ いきなり問答無用で部屋を爆破する獵人なんて、あたし認めないわよ！？ 風上にも置けないとか、そんな次元じゃない！！ それはもう人として間違ってるわ！！」

「まあ、天才の考えは凡人には分からないと言うしな」

「んんん！？ フォアン、それは何？ あたしが凡人でザレアの師匠が天才だとしても！！」

掴みかからんばかりに憤るベルに、フォアンは微笑を浮かべてみせる。

「ベルの考えは周りには伝わらないんだよ」

「あたしが天才だったか！？ 違うでしょ！？ あれ！？ もしかしてあたしの言いたい事は誰にも伝わっていない！？ あたしだけが疑問に思ってたりする！？」

「うん」「にや！」

「おかしいッ！！ あたしはおかしくないんだーっ！！ 皆がおかしいんだーっ！！」

長卓の上に足を載せて大声を張り上げるベル。それもやがて落ちて着くと、静々と椅子に戻った。

「……………ごめん、ザレア。話を、続けて」

「にや、にやあっ」

「——ベル」

フォアンの真剣な声にベルが顔を持ち上げると、

「ぱんっ、見えてたぞ」

「……………ねえ、フォアン。殴りたいって言ってるから？ 今すぐ実行したげるから」

「殴られたくありません」

ぼがーっ、とグーのパンチがフォアンの顔面に叩き込まれた後、少し紅潮した頬を下に向けて、小さな声で「ザレア、続きを」と呟く。その雰囲気、ザレアは「にやにやっ」と怯えに似た声を上げる。

「にやーっ、オイラの部屋を爆破した師匠は言ったのにや。『若者が引きこもって何してんだーっ！ 若者なら元気良く外で体を動かせてんだーっ！』……………とにや」

「……………まるでお母さんとか年寄が言いそうな台詞ね……………いきなり部屋を爆破してのけた獵人の台詞とは思えないわ……………」ベルがゲンナリと虚ろな瞳になる。

「その時オイラは感動したのにや！ この人に一生付いて行こうと思っただのにや！！」

「あんたの思考回路はどうなっとなじやーっ！！」

すっぱーんっ、と アイルーフェイク を叩いてツッコミを入れるベル。ザレアは振り子のように揺れる アイルーフェイク をベルに向けつつ、人差し指を頬に当てて小首を傾げる。

「あにゃ〜？ オイラ、何か間違った事、言っただかにゃ？」

「……………。もうツッコミどころ満載過ぎて何からツッコめばいい

のか分かんないんだけど……取り敢えず訊かせて。——今までの流れのどこに感動した訳!？」

「どこって……そりやもう、全部にや! 今までの話の全てが感動シーンにや! 師匠ほど素晴らしい獵人は、恐らくこの世に二人といないにや!!」

ベルはその場で四つん這いになった。ここまで思考回路が破壊された獵人は初めて見たし、恐らくこれ以上に凄まじい思考回路を持つ獵人はいまい……勿論、ザレアの語る師匠を除いて、だが。

「ザレアは本当に師匠の事が好きなんだなあ」

微笑を浮かべてポツリと感想を漏らすフォアンに、ザレアは身振り手振りを交えて照れ始める。

「にやにや、そんな事あるにや」 師匠は尊敬する獵人だからにや! オイラに獵人としての何たるかを叩き込んでくれた恩人でもあるのにや!!」

「……師匠が爆弾馬鹿なのは分かったけど……全ては師匠が元凶だと言つのも今、やっと分かったわ……」

ベルがフラフラと椅子に戻って来たのを見つつ、ザレアは アイルーフェイク を横に振った。

「にやにや、オイラは爆弾使いにやけれど、師匠は違つのにや!」

「あれ、そうなの? てつきりそうだとばかり……」

「師匠は太刀使いだったのにや。罾や道具は一切使わず、己と武器だけで巨大なモンスターと対峙する事が何よりの幸せだと言っていたにや」

……爆弾使いがまだ可愛く思える変人獵人なのね……

「罾も道具も使わずに、太刀だけで狩獵してるの? ザレアの師匠って。……まさか、あんたみたいに防具付けてないとか、そういう人なの?」

インナーのみで、更に爆弾も使わずに太刀だけで挑みかかる獵人を想像してみるベル。

……いや、軽く死ぬでしょ。

太刀は、フォアンの持つ大剣のように刃で攻撃を受け止める事は出来ない。刀身が大剣に比べて細身のため、攻撃を受けようとする、容易く折れてしまうのだ。防御が叶わない点では、ザレアの持つハンマーに似ている。熟練者が使う太刀捌きは見ていただけで心が奪われそうになる鮮やかなものらしいが、生憎とベルはそんな太刀使いと出逢った事が無い。

防御が出来ないのに防具を付けないなんて、自殺行為か、神風特攻とは思えない……眼前に佇む獵人もその一人だが。

「にゃ？ 師匠はちゃんと防具を付けてたにゃ？ 防具を付けないで狩獵なんて出来る訳が無いにゃ」小馬鹿にした様子で笑いかけるザレア。

「灯台下暗し！！ 灯台下暗し！！」ベルの必死の絶叫が酒場に木霊する。

「何言ってるんだベル？ ザレアはちゃんと防具付けてるだろ？」よく分かってない風に小首を傾げるフォアン。

「アイルーフェイク だけでしょ！？ あんたこそ何言ってるのよ！？ あんな紙装備は防具を付けてるって言わないのよ！！」ザレアを指差して喚き散らすベル。

「にゃ、オイラはこれだけで充分だから身に付けないのにゃ！ 師匠はギルドナイツの騎士長にやったから、師事してた時はいつもギルドナイトスーツを着てたにゃ」

——ギルドナイツ。それはハンターズギルドが所有する公然の秘密たる戦力。名称のみ実しやかに流れているのだが、噂によれば彼らは、違反を犯した獵人達を秘密裏に葬り去っているとか何とか……獵人の綱紀肅正のための組織らしいが、彼らを実際に見た者にベルは出逢った事が無い。一説によれば、獵人達の間に広がる荒唐無稽の夢物語のようだが。

疚しい事がある獵人は、近日中に闇へと葬られる……と言う怪談染みた噂まで流布されている程だが、ベルはザレアの話を嘘だとは思えなかった。彼女の師匠ならばあり得る、と素直に受け入れられ

た。

「……てか、ギルドナイツの騎士長が引きこもりの家を爆破する時点で色々間違ってる気がしてならないわ……」

右手で額を押さえてグツタリするベル。聞いている噂が噂だけに、ちよつと信じられない。

「ギルドナイツの騎士長が師匠なのか。凄いな。道理でザレアの狩猟の腕が天下一品な訳だ」

うんうん、と納得したように頷くフォアン。ベルもその点に関しては頷かざるを得ない。

ザレアは照れたように アイルーフェイク を擦りながら悶え始める。

「にやにや」 そんなに褒めないでほしいにやっ、そんなに褒めても——」 ザレアが大きなタルを取り出す。「爆弾しか出ないにや」

「どこから取り出した!? ねえ今、どこから取り出した!?」 大タル爆弾Gを受け取りつつ、喚き散らすベル。
今日も今日とて平和なラウト村なのだった。

02・ザレアの師匠（後書き）

師匠が師匠だからこそ、弟子もそういう弟子になる構図ですw
登場こそしなかったですが、どれ位変人か分かって頂けたと思いますw

いつか皆の師匠が出てくる話も綴りたいなあ、と現在画策中ですが・
・形にはなっていないせん；

次話“アネさん”・・・お楽しみに♪

03・アネさん

「あゝ、皆さん。ちよつといいですか？」

酒場で特に何をするでもなく雑談に花を咲かせていた三人の獵人^{ハンター}の許へ、酒場の管理人でもある給仕のお姉さん——ティアリイが近づいて来た。いつものメイド姿の彼女は、手に羊皮紙を持って、三人の長卓^{テーブル}の前で立ち止まる。三人の獵人の視線が自身へ向けられた事を確認してから、羊皮紙を長卓に置く。

「隣村であるカラスト村から依頼書が来ているのですが、受ける気はありませんか？」

カラスト村。ラウト村に近い——と言っても片道五日は掛かるが——寒村で、専属の獵人はいない。村としてはラウト村より幾分か大きく、村人の数も数十人に上る。街で“雪山”と呼ばれている狩場を利用する際に立ち寄れる中継地点^{ポイント}として利用される事がある、一種の宿場である。

以前、ラウト村とカラスト村を行き来している行商人の青年ウエズが行方知れずになった際、ラウト村の三人の獵人が成り行きで、雪山に現れた飛竜フルフルと、大猪ドスファンゴを狩猟した事から、三人はカラスト村で一躍有名人となっていた。それから言うもの、事ある毎に狩猟や採取の依頼が来るようになり、一時はアイルーの手も借りたい状況になった事がある。

ティアリイを見やると、彼女は朗らかな微笑を浮かべてベルを見返してくる。彼女もラウト村に来た時からの付き合いだ、未だに何を考えているのか読めない部分が多く、何ともミステリアスな女性だと、ベルは認識している。

「カラスト村かあ……。今度は何だろう……。てか、あたしらをただの便利屋か何かと勘違いしてない？ あの人達」

カラスト村もラウト村同様、財政難を抱えている村であり、ギルドへ直接依頼を要請する事が叶わず、剩^{あまつさ}え専属の獵人がいないと言

う、見ようによつては危機的な状況の村である。そんな村からの依頼だ、無碍^{むげ}には断れないのだが……

「この間は何で行ったんだっけ？ ポポノタンの採取だったっけ？」

「違うにや！ 雪山草の採取にや！」

「それよ！ 確かに狩場じゃないと採れないし、狩場が危険なのは分かるけど、ギアノスもブランゴもかなり間引きしたわよ！？ それでも尚、あたし達に頼むのはどうしてなの！？」

憤るベルに、フォアンは「そうだな」と顎に指を持っていつて悩ましげに応じる。

「村人を危険な場所に行かせたくないんじゃないか？ 獵人なら末だしも、ただの村人が狩場に行くのは、やっぱり危険だろう。獵人と一般人じゃ、体力も膂力^{ちから}も違い過ぎるからな」

至極真つ当な答を受けて、ベルは怯み「それはそうだけどお……」と唇を尖らせて語尾が小さくなる。

「それに、オイラ達を頼ってくれるのは、悪い気がしないのにや！ オイラ達が頑張れば、喜んでくれる人がいる……オイラは大満足にや！」

握り拳を作つて鼻息荒く続けるザレア。ベルは自分の立場が徐々に隅に追いやられて行くのを感じ、結局ため息一つで反論を諦める。この二人に対して言い争いは無意味だと、この半年間で確^{しつ}りと理解しているベル。

「……それもそうかも知れないわね。……はあ、偶にはあたしに賛同してくれる人がいないかしら……民主主義で負けっ放しは切な過ぎるわ……」

「俺はいつもベルの味方だぜ？」「オイラもにや！」

透かさず声を掛けてくる頼もしい限りの獵人二人組を見て、更に胸の底からため息が漏れ出る。

「そろそろ本題に戻つていいですか？」

ニツコリとティアリイが小首を傾げるのを見て、思い出したように、「あ、ごめん。続けて続けてっ」と慌てて応じるベル。

「雪山の狩場はもう皆さん、馴れてますよね？ 今回の依頼は、ブランゴが麓の方に現れるようになったので、間引きをしてほしいという内容です。数は二十頭」

「——二十頭？ そんなに増えたの？ いつの間に……」

つい最近と言っても、彼は二週間近くは雪山を訪れていない。ブランゴのような小型モンスターが増えても不思議ではないが……それにしても数が多い。

「不確定情報ですが、雪山に飛竜がいるのでは、という話を耳に挟んでいます」

——飛竜。大型モンスターの代表とも言える彼らは、名の通り空を飛んで移動する事が出来る巨大なモンスターだ。

雪山では以前、フルフルと言う名の飛竜を狩猟しているが、また別の飛竜が流れてきたのだろうか。だとしたら厄介だな、とベルは眉根を寄せて難しい顔になる。

「ただの間引きが一気にハードな狩猟になりそうだけど……カラスト村からは何か言ってくるの？」

ベルの問いかけに、ティアリイは小さく首を“否”と振った。

「ギルドからの情報がまだ届いていないだと思います。カラスト村には、このようなギルド直営の店がありませんし……仮に来ていたとしても、やはり報酬の方は……」

困った顔で曖昧に濁すティアリイを見て、ベルは「そう……」と難しい顔のまま応じる。俯いた状態の彼女の顔は、誰にも窺い知れない。

「——よし、決めた！」

ぱんつ、と膝を打って顔を上げるベルに、二人の獵人が興味津々と言った様子で視線を向ける。

「取り敢えずブランゴの間引きに行きましょう。そんでもって——飛竜がいたら逃げる。何がいるのか分からないじゃ、対策を立てられないからね。で、飛竜を確認したら一旦村に戻って対策を整えて——改めて狩猟に行きましょう。……どう？ 二人とも。何か意

見は？」

ベルの質問に、二人の獵人は一度顔を見合わせると、即座に握り拳を作って親指だけを立てて見せる。

「無いぜ」「無いにや！」

二人の対応に満足気に頷くと、ベルは改めてティアリイに向き直り、不敵な笑みを浮かべた。

「その依頼、受けるわ！」

ティアリイにカラスト村からの依頼を受注する旨を伝え、三人は酒場を後にし、村の南側へと向かって歩いて行く。

ラウト村には小さいながらも工房が設けられていた。工房とは獵人の武具を製造する施設で、獵人が訪れる事を見込んで造られた街や村には大概設けられている。尤も、三人は金銭面^{もっと}でベルに規制を掛けられていたので、活用する事は少なかったが……。

三人は武具屋のカウンターに辿り着くと、奥——工房へと向かって声を掛ける。

「アネさーんっ、武器、出来上がりしましたかーっ？」

両手を口に添えて大声を張り上げるベル。こうでもしないと、工房の作業音で声が届かないのである。

僅かな空白の時間が流れると、奥の方から「はあゝいつ、ちょっと待ってえゝんっ」と猫撫で声が響いてきた。

因みに、野太い男の声である。

続いて、店の奥からどしんっどしんっ、とまるでシェンガオレンが大地を踏み締めるような音を響かせて、スキップしながら巨大な男がやってきた。

「ああんっ、皆お揃いでようこそおん♪ あちしの顔でも見に来てくれたのかしらん？」

やたらとオネエ言葉を乱用する男の格好は、ティアリイと同じく

メイド姿だった。ただし、サイズが合わなくてあちこち肉が盛り上がって大変な事になっている。二メートル近くある巨軀に加えて筋骨隆々の小麦色の肉体は、三人の獵人を遙かに凌駕する凄まじさだ。彼なら素手でババコンガとやり合えそうな気がしないでもない。顔には化粧が施されているが、筋骨逞しい顔立ちを隠せていない。

「違うつてアネさん。あたしの声、聞こえなかったの？ 武器を取りに来たんだつてば！」

「ああんつ、そんなご無体な事言われちゃうと、あちし、泣いちゃう！」

ぱつつんぱつつんのメイド服のポケットから手拭ハンカチを取り出し、端を口に加えて「よよよっ」となよなよと崩れ落ちる巨人——アネ。

“アネ”と言うのは渾名であり、本名はガーネハルト。彼から自分の事を「アネさんって呼ばないと、拗すねちゃうんだからんっ」とぷりぷり怒りながら言われ、仕方なくそう呼んでいるだけである。

エルが年取つたらこんな風になっちゃうのかなあ……と、少し気が無いベル。

「……アネさん、芝居はいいから武器はどうなったのよ？ 出来上がってたら、見せてほしいんだけど」

ベルが呆れ果てた様子で腰に手を突くと、アネは手拭を噛み締めたまま、屈強な顔を情けなく歪めて立ち上がる。

「くすん……ベルちゃんの、い・け・ず」可愛くウインクするアネ。

「ごめん、何か殺意が芽生えた」

「——ベル、落ち着け。アネさんはモンスターじゃないぞ。モンスターに見えても、モンスターじゃないぞ」

握り拳を構えて飛びかかろうとするベルを、羽交い絞めにして押さえつけるフォアン。流石に臂力じりよくではフォアンの方に分があるようで、全く動かない。

アネはそんな二人の様子から目を離すと、「今、持って来るから、もう少し焦じらされてね」と笑み、再び地響きのするスキップを繰

り出しながら工房へと戻って行く。

それを見送るザレアの眼差しは熱かった。

「か、カッコいいのにな……！」

つくづくザレアの感覚は圏外だった。

「はぁいつ、お・ま・た・せ」これが完成品よぉんっ」

うつとりと陶酔している顔で大きな包みを持つてくるアネに若干引きつつも、ベルは包みを受け取る。ずしりとくる重みは、命を預けるに相応の重みを宿している。まだ実物を見てもいないのに、心が高鳴るのを抑えられなかった。

一旦カウンターに包みを戻し、丁寧に包みを解いていくベル。その瞳は子供っぽい光を宿し、新しい玩具を手に入れたかのように、包みを剥いでいくと、——やがて、隠されていた物が大気に晒される。

桜色の、美しい形状をした——弓。全体を覆う桜色は、先日狩猟したリオレイア亜種——桜火竜の上質な鱗や、堅牢な甲殻があしらわれているためだ。

美しく仕上げられた弓を見て、思わず感嘆の吐息を漏らしてしまうベル。アネは性格こそ難があるが、仕事はいつも完璧だ。ベルは顔を上げ、アネに会心の笑みを返す。

「ありがとう、アネさん！ 大事にするわ！」

「あぁんっ、もつとツ、もつと褒めてええええ————ッッ！！」

自分を抱き締めて絶叫し始めるアネに、やっぱり引いてしまうベル。この性格さえどうかかなれば、ベルの中では世界一の武具職人なのだが……

「あつ、と。これ、名前は何て言うの？ 新しい武器だから、名前が分かんないんだけど……」

ベルが桜色の弓に指を添えながら、アネに質問を投げる。上質な鱗が使われているだけあって、触り心地も良い。いつもカジキ弓を使っていたので、こういう形式の弓は懐かしいと共に、新鮮でもある。

る。

「ああ、その武器はハートショットボウワンって言うのよ。可愛がつてあげてね♪」

「うん！ 宜しくね、ハートショットボウワン……」

愛でるように、優しく弓の表面を撫でるベル。その仕草を見るだけでも、彼女の嬉しさがよく分かった。

「アネさん、俺の武器はどうなってる？」

ベルが弓を愛でている間に、フォアンが脇から身を乗り出してきた。そういえばフォアンも先日、アネに武具の依頼をしていたっけ、と思い出すベル。

視線を向けると、アネは不敵な笑みを浮かべて既に別の包みを用意していた。大きな包みは、恐らく大剣が入っているのだろ。包みから小さな唸り声のような音が聞こえていたので、ベルは小首を傾げてしまう。

「何か聞こえない？ ヴウウウン……って」

ベルが疑念を口に出している間に、フォアンが大きな包みを解いていく。

「ああ、その音はね、」

アネが説明する前に包みは全て解かれ、大きな剣が観衆に晒される。

一目見て分かった。——フルフルの大剣だと。

刀身は白いブヨブヨした皮で覆われ、刃の部分は鉱石があらわれ、取っ手の部分はゴム質の皮——ゲリヨスと呼ばれる鳥竜種の素材が使われているようだ。刀身からは絶え間無く「ヴウウウン」と電気音が発せられている。

「その武器の名前はフルミナントブレイド……刀身に上質な電気袋——電撃袋が仕込まれててね、常に電流が流れている、雷属性の属性付加を内包した大剣なのよう！！ その武器も、可愛がつてあげてねえん♪」

「フルミナントブレイドか……ありがたく使わせて貰うよ、アネさ

ん」

「ああんツ、もつとツ、もつと褒めてええええ————ッッ!!」
悶え苦しむアネ。

ふと、ザレアに視線を向けるが、彼女は逆にベルを見返してキョトンとしている。

「どうしたのにや？　ベルさん」

「いや……あんたは何も頼まなかったのかなあ、って」

「オイラは爆弾さえあれば何も要らないのにや!!　オイラが認める武器は爆弾だけにや!!　爆弾使いとして見損なって貰っては困るにや!!」

見損ないようが無いわよね……とツッコむべきか悩んでしまっべルだった。

03・アネさん（後書き）

新キャラ、その名も“アネさん”！！w

題名を呼んでどのようなキャラを想像をされましたか？

この物語は基本的にギャグパートが多いので、こういう仕様になりました、悪しからずw

次話“ブランゴ狩り”・・・お楽しみに♪

04・ブランゴ狩り

狩場に認定されている雪山は、流石に何度と無く来て馴れているので、拠点から出てすぐに広がっている麓に当たる場所——区画^{エリア}1へと、三人は移動を始めていた。区画1は草食動物などが草を食^はんでいる光景をよく目にする地帯なのだが、今回に限って違っていた。北側に美しい湖面が広がる草地に、何故かブランゴの姿が見受けられた。数は五頭。麓に現れる事自体珍しいのに、出現している数も初めての多さだ。

ベルは新調した武器——ハートショットボウワンを背中から下ろしながら、眉根を顰^{ひそ}める。何度も来ている場所だからこそ、その異常性を肌身で感じ取れる。

ベルの装備はいつもどおり。フルフルDシリーズと呼ばれる、赤いフルフル——即ち亜種の素材で造られた銃士用の防具を身に纏^{ガンナ}っている。頭具^{キャップ}だけは身に付けておらず、代わりに黄色いピアスを付けている。

「飛竜が出現したって情報、確信が持てるわね。——雪原地帯から追いやられて来たのかしら？」

「可能性はあるな。——カラスト村方面の区画のブランゴも念のためには狩猟しておいた方がいいかも知れないぜ」

ベルの独り言のような発言に、フォアンが頷いて応ずる。

フォアンの防具も以前と同じ。レックスシリーズと呼ばれる剣士用の褐色の防具を身に纏っている。武器は新調したばかりの大剣——フルミナントブレイドを背中に背負っている。

「にやにや……爆弾、足りるかにや……」

ブランゴの群れを見て悄然と縮こまるザレア。腰に提げられた小タル爆弾Gの数は優に十個確認できる。毎度の事だが、彼女は爆弾を限界まで持つてくる。

組合^{ギルド}では、狩場に一度に持ち込める道具の数に規定があり、小タ

ル爆弾Gは五個が限度になっている。因みに大タル爆弾Gは二つ、大タル爆弾は三つなので、大タル爆弾を大量に使いたい場合は、狩場に来て大タル爆弾を調合せねばならないため、大タルと爆薬、更に大タル爆弾Gを調合するためにはカクサンデメキンと言う名の魚も持ち込まねばならない。

恐らくザレアはその規定に則って爆弾を使っているのだろうか……いつ調合しているのか全く謎である。

因みにザレアの防具は、頭を守るネコの被り物——アイルーフエイクのみで、体は胸と股を隠す程度のインナーしか身に付けていない。これではモンスターからの一撃だけで致命傷となり得るが、彼女は本気だ。武器は正式採用機械鎚と呼ばれる、回転式弾倉の拳銃の弾倉を巨大化して、それに柄を付けたようなハンマーを腰に帯びている。

「爆弾が無くなる前に、ブランゴを一掃すれば問題無いでしょっ？それに今日は、あたしとフォアンの新しい武器のお披露目会でもあるんだから」

ウキウキした様子で弓に矢を番えていくベル。早く実践で使ってみたいのだろう、高揚感が周囲にも伝播でんぱした。

「よし、それじゃあ、とつとと狩猟を済ませるか」

そう呟いたのを皮切りに、フォアンとザレアがブランゴの群れへと駆け込んで行く。

——ブランゴ。牙獣種に分類される彼らは、白い体毛を纏った、人間ほどの大きさを誇る猿である。小型モンスターの中でも機敏な動きをする彼らを捉えるのは難しい。鋭利な爪を使って集団で襲いかかってくる事が多く、雪山を行き来する商隊が時折彼らに囲まれて立ち往生する。一般人にしてみれば、小型モンスターでも脅威には変わりないのだ。何せ、小型とは言え成人男性ほどの大きさがあるのだから。

五頭のブランゴはこちらに気づいていないようだが、警戒しているのか互いに鳴き声を交わし合っている。そこへ、フォアンとザレ

アが武器も構えずに走り込んで行く。ザレアの扱う武器はハンマーなので、武器を抜き放つても動く分には問題無いのだが、フォアンの扱う大剣は違う。その巨大な武器を構えるだけで動きが鈍ってしまい、いつもどおりの動きが出来なくなってしまう。そのため大剣使いは対象の眼前に辿り着くまで武器を抜かずに接近する必要があるのだ。

「ブゴッ？」

一番近くにいたブランゴが、接近して来る獵人に気づき、その場で跳び上がる仕草をする。強靱な前肢と後肢を使う事によって、縦横無尽に跳びかかる事が出来る彼らは、跳び上がる仕草をする事によって、周囲の仲間に敵襲を報せる。

他のブランゴがこちらに視線を向ける前に、フォアンが一番手前のブランゴの許へ辿り着くと、背中に提げていた大剣——フルミナントブレイドを抜き放ち、そのままブランゴの頭頂へと叩き下ろす。

——ヴァリツ、と電気が走る音と、肉が焼けるような音の複合音が奏でられ、ブランゴの体躯が両断される。流石に小型モンスター程度では武器の良し悪しは分からないだろうが、フォアンはその手応えに満足しているようだった。

ベルはその様子を視界の隅で捉えつつ、弦を引き絞って矢を撃ち放つ。新品だから当然だが、癖の無い動作で放たれた矢は、フォアンがぶった切ったブランゴとは別のブランゴの頭を直撃。ブランゴは苦しげに呻き、怯む仕草を見せる。一撃が以前の弓よりも重くなっているのだろう。

……あれ、でもカジキ弓【姿造】の方が攻撃力は高い筈よね……ふと小首を傾げてしまうが、その思考をすぐに隅に追いやり、戦闘に意識を集中する。

ベルの放った矢が頭に突き刺さったままのブランゴが物凄い勢いで駆けて来る。四本の脚を使った速度は人が出せる速度を軽く超えている。あっという間にベルとの距離を殺すと、大きな口を開け、牙を使ってベルに噛みつこうと跳びかかる。

ベルはその動きを具に観察し、一步バックステップを踏むだけで軽く躲してみせる。眼前で牙を噛み鳴らすブランゴを見やり、即座に矢を引き抜いて弓に番え、——素早く撃ち放つ。至近距離で放たれた矢はブランゴの眉間を再び射抜き、更に損傷を加える。

「ブゴウ！」

右手を大きく振り被り、そのままベルの体に殴りかかってくるブランゴ。ベルはそれもバックステップで軽く躲し、更に矢を引き絞って——放つ。三度眉間を貫かれたブランゴは「グゴアアツ」と踊るように前肢を宙に舞わせ、その場に頽れる。動き出す気配は無い。

「——三撃か。まあまあね」

中々の攻撃力に満足気に笑むベル。でも、やっぱり何かおかしい。カジキ弓【姿造】よりハートショットボウワンの方が攻撃力が高いような気がする……これは気のせいではないと思うのだが……ベルは小首を傾げて唸り始める。

その間にもブランゴの数は減らされる一方だった。ザレアが所構わず小タル爆弾Gを設置し、次々に爆破していくと言う、無差別爆破テロを実行したためだ。あつという間にブランゴの数は減り、五分と待たずに動くブランゴの姿が消え失せてしまった。

ブランゴの屍が無造作に転がっている草地で、獵人達は彼らから取れる素材を剥いでいく。今回の狩猟依頼はブランゴの間引きの依頼なので、狩猟した分の素材が無いと依頼の達成が認められないのである。

——尤も、カラスト村の村長は細かい事は気にしない性格で、ある程度数さえ揃っていれば達成を認めてくれる大らかな人物だったりする。だから必要最低限の素材で充分なのだが、ベルは「どうせなら売れる素材は多いに越した事は無いじゃないか」と、売却のために素材を確りと剥ぎ取るように二人へ言い聞かせていた。

「でもさ、ベル。この間——リオレイア亜種を狩猟した時は、色々剥がなかったよな？ 流石にドスランポスは剥いただけ」

「あの時はメインがりオレイアだったし、他の素材で道具袋が一杯になったら嫌だったし……今回は飛竜が現れても一時退却する作戦だから、遠慮無く剥げるじゃない」

——この半年でベルは変わったと、二人の獵人は思った。

逢った当初、ベルの行動理念は何を賭してもお金が優先されていた。それが現在、少し変わってきているように見える。お金は確かに大事だが、それよりも優先すべき事があると、認識が変わったように、二人には映った。それは時に仲間だったり、時に村の安全だったり、常に移ろっていたが、昔とは違っていた。

フォアンとザレアが感慨深げにベルを見つめていると、彼女は不審そうに眉根を寄せて腰に手を当てる。

「……何よ？ 二人揃ってあたし見て」

「ベルは可愛いなあと思つて」「ベルさんはカッコいいのにや！」

「はあ？ ……あたしを褒めても何も出ないわよ？ 元氣ドリンクも、大タル爆弾も」

ぷいっと顔を逸らすベルだったが、その僅かに紅潮した頬を隠す事は出来なかった。

「ほら、早く間引きを済ませて、飛竜を拝んでみましょうよ。話はそれからでしょっ？」

慌てた風に歩き出すベルに、フォアンは「了解です、隊長」と敬礼し、「分かったのにや！」とザレアが拳手して、追いかける。

その視線の先——雪山の頂上付近では、雲行きが怪しくなっていた。ゴロゴロと、雷鳴にも似た、猥染みた唸り声が響いている……

04・ブランゴ狩り（後書き）

世間的にはフルフル大剣よりキリン大剣なのかしら．．．見た目的にw

でもきつと、大剣使いなら一度は通る道だと信じたい．．．

ハートショットボウは見た目も性能もいいと思うので、使う方はそれなりにいると思いたいw

閑話休題。

現在、P2Gの二周目（最初から）プレイしてしまして、同じく二周目の友人様二人とプレイ中だったりします。

P2Gでは一応全武器に触れてみた口ですが、最近は大剣に嵌まっ
てしまい、フォアン君みたいな状況だったりしますw

大剣．．．いいねb

や、全武器好きなんですがねw 最近は大剣なのですw
脱線したまんまですが、この辺で！

次話“オルトレイ”．．．お楽しみに♪

追記

指摘、質問、些細な事でもいいので、感想を寄せてくれると跳んで喜びます。また、今後とも宜しくお願い致しますー（・ー・）ー

05・オルトレイ

エリア
区画2——雪山の麓に位置する狩場にいたブランゴを粗方狩り終え、後は鍾乳洞と雪原地帯を残すところとなり、三人の獵人は鍾乳洞の入口で地図を広げて座り込んでいた。

「思ったんだけどさ、フォアン」

ベルが地図から顔を持ち上げて視線を向けると、フォアンは「どうした？」と飲んでいた元氣ドリニコから口を離す。

「あんたの千里眼で、大型モンスターがどこにいるか分かるんじゃないの？」

「ああ、分かるぞ」
間。

「……まあ、あたしも今まで気づかなかったから文句は言いたくないけど……何で気づいていながら何も言わないかなあんたは！？それがあれば、どんな大型モンスターがいるか、どこにいるか、すぐに分かるじゃない！！」

「どんな大型モンスターがいるか、って言うのは、あくまで鳥竜種か、牙獣種か、甲殻種か、飛竜種かって言う感じの、種類くらいしか分からないんだぜ。それに、ティアリイさんも言ってたじゃないか。飛竜がいるかも知れないって」

「……え、じゃあやっぱり……飛竜がいるの？」

「ああ、それも二頭だ」

ベルが思わず四つん這いになって項垂れる。

「……ねえ、何かあたし達って、つくづく二頭に縁が無いかしら……？」

「爆ぜ応えがあるにやね！！」握り拳を作って嬉しげにザレア。

「初めて聞く単語なんだけど！？何、爆ぜ応えって！？どんな時に使うのよ！？」

「爆破のし甲斐がある時に使うのにや！爆弾をたっぷり持って来

といて良かったのにや」

「……飛竜はあくまで爆破の対象でしかないのね……」遠い目になっ
てしまふベル。

「一頭は区画3——この先にいるみたいだし、もう一頭は区画8——
雪原地帯の、それも頂上付近にいるのは分かってるんだが……ど
うする？ 確認してみるか？」

どこか自信無さ気に尋ねてくるフォアンに、ベルは「あつたり前
じゃない！」と意識を現実に戻して、何を当然の事を、と言わんば
かりに应じる。

「それとも、何？ どんな飛竜がいるか分かってるの、あんた？

……まさか、フルフル二頭とかじゃないわよね？」

流石にそれは無いわよね、と言いたげに苦笑するベルの表情が凍
りついたのは、次の瞬間だった。

「恐らく——ティガレックス二頭だ」

区画3の鍾乳洞は、区画2の草地から入ると、鍾乳洞の上部に出
られる。上部は細い道が奥の鍾乳洞へと繋がっており、その小道は
半円を描くように、鍾乳洞の上部を回っている。中心は大型モン
スターが眠る場所として使うのに十分な広さが設けられている。中心
から上部の通路へ戻るには、過去に獵人が造った石の突起を使うし
かない。中心と上部の通路までの高さは十メートルと言ったところ
だろうか。高所恐怖症の者にとっては目が眩むような高さがある。

鍾乳洞の中央に、褐色の鱗と甲殻を纏う、巨大な塊が蹲すくまっていた。
大きな体は、獵人の五倍以上はあるうか。鋭い爪を有する前肢は、
飛竜種では当然有している翼は、走るための筋肉が異常に発達して、
まるで筋肉の塊とも言ふべき形をしている。全身を斑まだひに覆ってい
る青い筋は、恐らく血管だろう事が分かる。

——ティガレックスは、見下ろしている獵人に気づく事無く、彼

にとつては狭い鍾乳洞内を優雅に闊歩していた。

「……………あれが、もう一頭いるの……………」

三人の獵人は鍾乳洞上部に走る細い通路の上に寝そべり、物音を立てないようにしてティガレックスの様子を観察していた。

ベルの隣に寝そべるフォアンが小さく首肯したのが分かり、ベルは小さく嘆息する。

「あんなの、あたし達の手に負えるの……………？ 流石に無理じゃない……………」

「それはやってみるまで分からないさ」フォアンが不敵に微笑を浮かべて応じる。

「大丈夫にや！ オイラが確実に爆破して仕留めてみせるにや！ 爆弾使いの名に懸けて！！」息巻いて喚き散らすザレア。

「しーっ！ ザレア、しーっ！ 分かったから静かにね静かに！」
「にやにやっ」

声を出来る限り小さくしたベルの必死の呼びかけに、ザレアは思いついたように、アイルーフェイクの頭を押さえ、小さく縮こまる。

再びティガレックスへ視線を向けるが、こちらに気づいた様子は無い。ホッと胸を撫で下ろすベル。

「…………一度、村に戻りましょう？ まずは準備を確り整えてから。いいわね？」

「了解です、隊長」「分かったのにや！」二人とも小さな声で応じる。

二人の様子を確認してから、ベルも頷き、三人はその場を後にした。

三人は雪山を後にし、ラウト村ではなくカラスト村へと向かった。片道で二日半掛かる道程を、アプトノスに無理を言わせて一日半

で辿り着き、事の次第をカラスト村の村長に説明した。

「なるほど……カラスト村は現在、ティガレックスの脅威に晒されてる訳じゃな!？」

村長の老爺——オルトレイは皺だらけの顔を緊張感に引き攣らせながら「かあッ」と入歯を吹き飛ばした。

「村長、入歯が……」

「ふがーっ!」驚いたような声を張り上げ、飛んで行った入歯を口に嵌め直すと、「もごもご……こいつは失敬。くう……ワシがもう少し若ければ、ティガレックスなど、片手で捻り潰してやるのじゃが……歳には勝てんの」

ふあっふあっふあ、と快活に笑う老爺。緊張感が欠落しているようだ、彼はこれでも何十年もカラスト村の村長を務めている。この程度の危機では最早動じる事さえ無いのだろう。

オルトレイは完全に曲がった腰を、杖を突いて姿勢を整えている。頭髪は最早一本も無く、磨かれた灰水晶のように光り輝いている。そのあまりの眩しさにベルは目を細めてしまう。

「村長って昔、獵人だったの？」

気さくに話しかけるベルだが、初めからこうだった訳ではない。

以前、カラスト村とラウト村を訪れる行商人が雪山に行ったまま消息を絶った際、ベル達が搜索して見つけ、更に雪山に棲みついた飛竜フルフルと大猪ドスファンゴを狩猟した後、村長と話す機会があったのだが、それ以来、村長は自分に対して礼儀は要らないと名言しているのだ。ベル自身、相手に敬意を払う事が苦手だったために受け入れたが、流石にカラスト村の村民の殆どが村長の事を「ハゲ村長」と呼んでいた事には驚いた。

オルトレイは「うむ」と震える動きで頷き、再び入歯を落とした。「ふはしはひよりゃーもう、すひよいひゃんひゃーひやつひゃふおい!」

「村長、入歯が外れてます」

「おっと、もごもご……。……で、何の話じゃったかいのう?」

「ティガレックス！ ティガレックスが雪山に現れたんですよーっ！」

「おお、そうだったそうだった！ いかんなあ、すっかり耄碌もろろくしてしまったわい……。で、何の話じゃったかいのう？」

「村長、態フザとですか？ 態とならいい加減キレますよ？ 村長の頭であるうが引つ叩きますよ？」

「今にも殴りかからんとするベルを羽交い絞めにするフォアン。」「落ち着けてベル。相手は村長だぞ。年長者だぞ。一応依頼主だぞ。」「そうじゃそうじゃ！ 年寄りを労わらん若者は許さんぞ！ このオルトレイ、耄碌しても力だけは獵人に負けんのじゃ！ やーいやーいつ、あほーあほーっ」自分の尻を叩きながら「あっかんべー」をしてくるオルトレイ。

「離してフォアンツ！ あの腐れジジイだけはあたしの手で葬り去らなきゃいけないのよッ！！ 奴だけは確実に仕留めなければアアアア——ツツ——！」

「にゃー、皆さん楽しそうだにや。オイラも混ぜてほしいのにやーっ！」

テンヤワンヤだった。

騒ぎが落ち着いた後、村長の頭に大量に手の痕が付いていたが、誰もツツコまなかった。

「ではまた、依頼を頼んでも良いじやろうか……。報酬は……」

もごもごと、入歯の調子が悪そうに口ごもる村長——オルトレイ。それを見ると、ベルは苦笑を浮かべて先に言葉を発する。

「それじゃ、依頼の受注金が十で、報酬は百——で、どう？」

「ふおおーっ!?」思わぬ低額に、オルトレイの口から入歯が吹き飛ぶ。慌てて入歯を詰め込むが、その顔からは驚きが消えていなかった。「そ、そんな端た金では回復薬を一個買っただけで消えてしま

うぞ……！？」

「まあね。……でも、それで村が一つ救えるなら、あたしはたとえ一々でもやるわ」

ニツコリ微笑むベル。だが、フォアンもザレアも、彼女が無理している事に気づいていた。本当はもつとお金が欲しいと思っているのは言うまでも無い。けれど、お金を出せない程に村は財政難に見舞われていて、更にそんな村を巨大なモンスターが襲うかも知れないという条件が重なれば——ベルは過去の惨劇を思い出さずにいられないのだろう。

無理をしているのが見え見えなベルの肩に、ぽん、と手を置くと、フォアンは彼女が振り向くのを待って、微笑んだ。ベルはその微笑の意味を何と無く理解して、苦笑を返す。

「おお……流石は我らが救世主様じゃ……！　ワシが村民全員を代表してお頼み申す、どうかっ、どうか村を、モンスターの手から守ってくれ……！」

その場に跪いて頭を垂れる村長に、ベルは確りと頷いてみせた。

「任せといて、村長。——必ずや依頼を完遂するわ」

「……のう、ベルや？」

「ん？　どうしたの村長？」

「どうせなら一々で受けてくれぬかの？」

「嫌です」

「ひょ！？　さ、さっき一々でも受けてくれるって……」

「嫌です」

「う、嘔吐きじゃ！　ベルは——」

「嫌です」

報酬の値下げ交渉は断固として認めないベルなのだった。

05・オルトレイ（後書き）

友人様に言われて気づきましたが、この作品は基本ギャグキャラしか出てきませんね（笑）確信犯だらって思われそうですが（苦笑）新キャラのオルトレイは設定では割とマトモな方だった筈なのに、気づくと入歯を所構わず噴出すボケ爺さんと化してしまいましたし（笑）

これが【ベル】マジック・・・マトモなキャラが破壊されると言う・・・

次話“ゲルトス”・・・お楽しみに♪

06・ゲルトス

一度ラウト村に戻って準備を整えようと思っていた時、都合よく行商人が通りかかった。

「あれ？ ベルじゃん。オマケにフォアンとザレアもいるし。どうしたんだ、皆揃って？ ——まさか、ラウト村からカラスト村に鞍替えしたのか？」

相も変わらぬ鳥の巢へアーの行商人——ウエズは巨大な風呂敷を背負って村の入口から声を掛けて来た。こいつはしめた、とベルが舌なめずりをする。

「ウエズ。この先の雪山にティガレックスが出没したのよ。しかも二頭！」

「二頭も！？ そりゃーすげえな。これじゃ暫くはカラスト村に駐留しないといけないな——やれやれと肩を竦めるウエズ。

「あたし達が狩猟してくるから安心してよ、ウエズ」握り拳に親指を立てるベル。

「え、マジで！？ うおー、そりゃ助かるぜ。頼むな！」同じ手の形にして笑むウエズ。

「てな訳でウエズ。道具をタダで譲ってよ」ニツコリと手を差し出してくるベル。

「ああ、任せとけ！」どんつ、と胸を張ってから数瞬の間を置いて、
「……って、何イイイ—— ツッ！？ おまつ、巫山戯ふざけんな！
何ドサクサに紛れてとんでもねー事口走ってんだ！？」やつと言葉の意味を理解して絶叫するウエズ。

「あら、嫌なの？」不思議そうな眼差しでウエズを見やるベル。
「当たり前だろ！！ こっちはこれで生計立ててんだ、常識で考える！」

「ふうん……嫌なんだ？ あたしの言う事が聞けないんだ？」ねつとりと粘りつくような視線でウエズに絡むベル。

「なつ、何だそのネンチャク草のような絡み方はっ。ぼ、僕だつてこればかりは譲れないぞ！ 道具はちゃんと金を払って受け取って然るべきだ！」怯えながらもここは譲らないウエズ。

「ねえウエズ。耳、貸しなさいよ」ちよいちよいと、手招きするベル。

「ん？ 何だよ、どうでもいい話なら聞かないぞ……」警戒しながらも耳を近づけるウエズ。

村長と二人の獵人が見守る中、ベルがウエズに何事か耳打ちするすると、ウエズの表情が驚きに変わり、泣きそうになり、やがて悄然と肩を落として諦念を感じさせる表情で「分かったよ……好きにしてくれよ……」と半ベソを掻いて風呂敷を下ろし始めた。

突然の変わりように皆が驚いていると、ベルは「にじしし」と悪事を働いた後の小悪党のような笑みを浮かべ、風呂敷の中を漁りだす。

「どんな脅迫をしたんだ？」

風呂敷を漁っているベルに背後から声を掛けるフォアン。ザレアも興味があるのか、身振りで「わくわくっ」としている。ベルはむう、と笑みを消して不機嫌そうに表情を移ろわせる。

「脅迫だなんて失礼ね。あたしはただ、ウエズのこれまでした事を村長に話すわよ、って言っただけよ」

「それを脅迫と言わず何と言った？」苦笑を滲ませるフォアン。

「ベルさんは実は悪党の中の悪党……大悪党なのにや！？」驚く仕草をするザレア。

「違うわよッ！！ ほら、ごちゃごちゃ言っでないで今の内に道具を掻っ払うわよ。今ならどれでもタダなんだから……ぐひひ、いい道具の入手方法を見つけちゃったわね……」

「ザレア、ベルはもう悪党の域を超えてる……これは——悪魔だ！」

「何と言う事にや！ ベルさんは既に悪魔……モンスターの中でも最強のモンスターになってしまわれたのにな！？」

「ちよっと！？ 人を勝手にモンスターにしないでくれる！？」

「うう、コニカさん……僕は負けません、あなたと結ばれるまでは……ッ」

ウエズが一人悲しげに四つん這いになっていると、そこに誰かの影が近づいて来て、肩に手を置いた。ウエズが見上げると、村長——オルトレイの姿があった。

「わ、ワシで良ければ、結ばれてやつても……良いぞ？」

「ふあい！？　ちち、違いますよ！？　村長は村長でも、ラウト村の村長、コニカさんですからね！？　ちょッ、そんなウルウルした瞳で僕を見ないでエエエ——ッッ！！」

やっぱりテンヤワンヤなのだった。

「——御三方はウエズ殿の知り合いであるのか？」

ウエズの風呂敷を漁り終え、雪山へ向けて再びアプトノスの馬車に乗って出発しようかと言う時、不意にベル達に声が掛けられた。振り返ると、村の入口に男が立っていた。その防具一式を見て、刹那に彼が上級獵人だと気づく。

身に纏っている防具は、グラビモスと呼ばれる、巨大な岩石の塊のような飛竜の素材で造られたグラビドシリーズ。あしらわれている甲殻は恐らく上質の更に上——重厚な甲殻のようだ。更にその中には“天殻”と呼ばれる、珍しいを超えて獵人でも数百人に一人しか見つける事が出来ない素材も使われている。更に武器もグラビモスの素材で造られたランスを背負っている。そのランスにしても、ベル達は名前すら知らない武器で、ただただ目を奪われるばかりだった。

「え、つと……うん、そうだけど……あんたは？」

「わがはい吾輩はゲルトスと申す。故在って各地を巡っておる、流れの獵人である。此度はウエズ殿の護衛を買って出て、カラスト村まで参った次第である」

「ああ、ゲルトスさんは人探しの旅をしてるんだってさ。それで、その序^{ついで}でって事で、一緒に各地を回ってたんだ」

ウェズがオルトレイから逃れようと後退りながら説明を加える。

「——時に、貴殿らの狩猟に同行しても宜しいだろうか？」

ゲルトスと名乗った男の顔はザレア同様、窺い知る事は出来ない。グラビモスの重厚な素材が使われた頭具^{ヘルム}が、完全に頭部を隠してしまっているためだ。声からして三十代ほどだと思えるが、後は何も分らない。

身分に就いては分らないが、獵人としての実力で言えば、の上……恐らくザレアをも凌^{しの}ぐ腕前だと言う事は、身に纏う装備品からして言わずもがなだ。

そんな獵人が手を貸してくれるなんて、願ったり叶ったりだ。ベルは微笑を浮かべて、ゲルトスの許へと歩み寄り、手を差し出す。

「あたしはベルフィーユ。長いからベルって呼んで。えつと……ゲルトスさん」

「ゲルトスと呼び捨ててくれて構わぬ。——宜しくお頼み申す、ベル殿」

握手を交わすと、脇からフォアンがやって来て同じように手を差し出す。

「俺はフォアン。宜しくな、ゲルトス」

「こちらこそ、宜しくお頼み申す、フォアン殿。……そちらのお嬢さんも、宜しくお頼み申す」

ゲルトスがザレアに視線を向けると、彼女は何故か怯んだように縮こまり、「にやにやつ」とベルの後ろへ隠れてしまう。

「ザレア？ どうしたのよ？ 隠れてないで挨拶^{アイザツ}しなさいよっ」

「にや……」警戒した様子でベルの後ろから出てこようとしないうザレア。

「はっはっは、どうやら警戒されてしまわれたようですね。……ザレア殿と申されるのか。確^{しか}と覚えておこう」

ゲルトスが一つ頷いて、馬車に乗り込むのを見て、ベルは不思議

そうにザレアに向き直る。

「どうしたのよ？ ザレア。もしかして彼と知り合いなの？」

「にゃにゃ……」 悄然と肩を落としてそれ以上は何も言わないザレア。

ベルが更に言い募ろうとして、フォアンに肩を叩かれる。振り返ると、真面目な顔をしたフォアンが頭を横に振っていた。

「言いたくないのなら、言わない方がいいさ。無理に聞いたって、いい事なんか何も無い、——だろ？」

「……そうね。ごめんね、ザレア。言えるようになったら、聞かせてね？」

「にゃにゃ……ごめんなのにゃ、ベルさん、フォアン君……」

瞳を潤ませていそうな様子で見上げるザレアに、二人の猫人は柔らかに微笑を返した。

06 ギルトス（後書き）

毎度悲惨な役回りを強いられるウエズ君登場でしたw
更に三人目の新キャラ、ギルトス。

彼に意味深な反応を見せるザレアの真意とは・・・！？

次話“ザレアの正体”・・・楽しみに♪

07・ザレアの正体

狩場である雪山に辿り着き、^{ベースキャン}拠点から草地、鍾乳洞を通って^{エリア}区画7——雪原地帯へとやってきた一同は、鍾乳洞の入口付近で作戦会議を開いていた。

「フォアンの話だと、ティガレックスは今、区画8——頂上付近に一頭、区画3——鍾乳洞の広間に一頭いるらしいわ。鍾乳洞の広間は正直、ティガレックスとやり合うには手狭だから、先に頂上付近にいるティガレックスから狩猟する事にしたんだけど……凄い猛吹雪ね」

夜の雪原地帯は天候が荒れていた。夜の闇に加えて数メートル先も見通せない程の猛吹雪である。このままここで戦闘が始まれば、悪戦になるのは言うまでも無い。少しでも天候が回復してくれればいいのだが……今の所、好転する兆しは無い。

「これじゃ、仲間の声も聞き取り難いし、合図も出し辛いな……更に相手はティガレックス……。悪い条件が重なっちゃったな」

難しい表情で、雪原地帯で荒れ狂っている風を見やるフォアン。いつに無く真剣な表情をしていると、ベルも釣られて似たような表情になってしまう。

「——だが、頂上付近も同じ天候だとは限るまい。一度足を運んでみる価値はあるのではなからうか？」

進言したのは新参者のゲルトスだった。彼もザレア同様、表情が読めないが、声音や語調から真面目に考えた末の進言だと知れる。

二人とも頷き、先刻から一言も発しないザレアに視線を向ける。

「ザレアも、それでいいかな？」

ベルが水を向けても、ザレアは「にゃ！」と短く頷くだけで、それ以上の反応は見せなかった。いつもなら二言三言続いてもよさそうなものだが、今回ばかりは違うらしい。よほどゲルトスを警戒しているのか……

ベルも無理に返答を求めず、小さく頷いて、一同に「じゃ、区画8へと向かいましょう」と告げ、視界不良の雪原地帯に足を踏み入れる。

荒れ狂う風は雪を凶器に変える。ホットドリンクを飲んでも寒さが総身を冷やし、耳を千切らんばかりに風が叩きつける。“前を見る”だけの行為が、非常に苦痛に感じられる。吹雪く音が鼓膜を覆い、背後にいるであろう仲間の発する音さえも掻き消されてしまう。もし、ティガレックスがこっちに向かって走って来ていたら——そう思うだけで肝が冷える。視認しようにもこの吹雪だ、確実に発覚が遅れるだろう。相手より先に自分が相手を視認できなければ、最悪即死もあり得る。

区画8が少しでも天候が回復していますように——と祈りながら歩いていると、不意に背後から大声が発せられた。

「——ベルツ、避ける——！」

声はフォアンのものだ。——まさかティガレックスが！？ と思考が至った瞬間、ベルは咄嗟^{とっさ}に周囲を見渡すように反転し、——迫り来るモノを見て、横合いに転がった。

硬い雪の上を転がってすぐに起き上がると、そこには——ランスを構えたゲルトスの姿が在った。ベルに向かって突撃して来る、ゲルトスの姿が。

「どういうつもりだ？ ——ゲルトス」

ベルの前に歩み出で、大剣に手を触れるフォアン。その表情はいっくに無く硬い。ベルは今の出来事を即座には理解できなかったが、フォアンの声を聞いて徐々に思考が現実に戻ってくる。

警戒した様子でゲルトスを見つめていると、彼はランスをこちらに向けて構え、大きな声を張り上げた。

「吾輩は姫様を連れ戻しに来た騎士である！ 邪魔な者共はここで排斥させて貰う——！」

吹雪が静かに思える程の空白の間が流れた。

「……………姫様？」小首を傾げるベル。

「そこにおわすザレアと騙^{かた}る者の正体を教えてやろう！ パルトー王国第一王女、ルカ姫であらせられるぞ！！」

更に、間。

「……えーと、そうなの？ ザレア」よく分かってない風に視線を向けるベル。

「ちつ、違うのにや！ オイラはザレアなのにや！ ルカ姫なんて全然知らないのにや！」 アイルーフェイク をこれでもかと横に振って否とするザレア。

「誤魔化しても無駄ですぞ姫様！ パルトー王国騎士団団長ゲルトスの眼に狂いは在りませぬ！！」

断固として主張を曲げないゲルトスを半眼で見やるベル。そして再びザレアに視線を向けて、ゲルトスを指差したまま尋ねる。

「……とか言ってるけど？」

「しつ、知らないのにや！ パルトー王国騎士団最強で、実は獵人^{ハンター}としても名を馳せてるゲルトスなんて、オイラは知らないのにやっ！」

……隠し事下手過ぎるでしょ、ザレア……

呆れ果てた様子でザレアを見つめた後、毅然とこちらを見やるゲルトスへ視線を向け直す。

「……って言ってるけど？」

「嘆かわしい限りであるッ。あの忌々しい獵人が姫様の部屋を襲撃した時から姫様は変わってしまったわれた……ッ、あの狂^{イカ}れた獵人が来なければこんな事には……ッ！！」

ギリギリと奥歯を噛み締める音が聞こえてきそうな程、苦渋を紡ぐゲルトス。

恐らくその“忌々しい獵人”と言うのが、ザレアが師事してきたギルドナイツの騎士長なのだろう。確かに、今の話が真実ならば、ザレアが道を踏み外した箇所は間違い無くそこだろう。その事件が無ければ、ザレアはもしかすると姫のまま籠の中の生活を余儀無くされていたかも知れない。

そこではたと気づくベル。ザレアは引きこもりだったのではなく、周囲の人間から外に出ないように見張られていたのではないかと、と仮にザレアが一国の姫君だとすれば、それは当然の処置と言える。

ザレアにとつては“引きこもり”に繋がるのかも知れないが……

「あの忌々しき獵人のせいで姫様の人生が狂わされたも同然！！

まさか、ここまで悪化の一途を辿っているとは思っておりませんでした……ッ。元凶である忌々しき獵人は、必ずやこの手で誅せねばなるまい！！」

熱く語り始めるゲルトスに、まあ確かなあ、とベルも思うが、口を挟むつもりは無かった。

「師匠を悪く言わないでほしいにや！！ 幾らゲルトスでも、師匠を馬鹿にするのは許さないのにや！！」

ゲルトスの一方的な言い分に喚き返すザレア。刹那、ハッと何かを思い出したように アイルーフェイク の口の部分に手を添え、

「あわあわっ」しながら弁明を始める。

「にやにやつ、オイラはル力姫じゃにやいけれど、きっとル力姫はそう思ってるにやつ。そんな気がするにやつ。誰だつて、な恩人を誅られるのは快く思わない筈にやつ」

苦しい言い訳を並べ立てるザレアに、ゲルトスは悔しさで齒噛みしている様子だった。

「忌々しい下郎の話などどうでもいいのですッ！ 姫様！ 姫様は現在のパルトー王国の実状をご存知在るまい！？ 国王陛下が病に臥され、実質、王国内は無秩序状態なのですぞッ！ 今こそ姫様の御身を民衆に報せ、再び秩序と安寧を取り戻すべきではありませんか！？」

ゲルトスの重量のある言葉に、流石のザレアも二の句が継げない様子だった。無理も無い。彼女が姫ならば、国王陛下は実の親。親が病に臥せっているのに、ここで無理を言う訳にもいくまい。

どうすべきか分からない様子で縮こまるザレア。ベルは彼女を見ていられず、イライラした様子でゲルトスに向かって言を発する。

「ちょっとあんた！ さつきから言いたい放題言ってくれるけど、ザレアの意志を考えた事あるの？」

「ルカ姫様だ！ …… 姫様の意志、だと……？ …… 今まで姫様の意志を尊重して、自由にさせてきたつもりだが、—— 国の内情を考えよ！ 民が暴徒に襲われ、国が荒れた現在、姫様の存在は必須！ …… それでも尚、姫様の意志を尊重しろと……？ では国はどうなる！？ 民を犠牲にしても貫かねばならぬ事なのか、これが！？」

ゲルトスの正論に、唇を血が出る程に噛み締めても、反論できなかった。悔しさが胸の中から湧き出すが、それが明確な形を取る事は無い。誰もいなければ、この場で地団駄を踏みたい気分だった。

—— 悔しいが、彼の言葉は正論で、何も言い返せない。言い返せる反駁は、全て我儘と取られるべき、弱い言葉ばかりだ。悔しさのあまり、怒りに似た感情が顔に上る。

ベルがゲルトスに跳びかからないように、フォアンがチラリと横目でこちらを窺ってきたが、言葉を発する事は無かった。無言のまま、ゲルトスを睨み続ける。

「…… 分かって貰えただろうか？ 一国の存続と、姫様の意志。どちらが大事か—— 貴殿らにも、理解して貰える筈だ」

「…………… ツ」

ぎり、と奥歯を噛み締めるベル。にが虫を噛み潰した顔には、苦渋が色濃く浮かんでいる。理解は出来る。だが、感情—— 本能が許さないのだ。

そこに、

「—— 不味い、全員聞いてくれ！ テイガレックスが——」

フォアンの驚きに満ちた声が、雪原に響いた瞬間だった。

吹雪の勢いが僅かに衰えた。白銀の世界が刹那の静寂に包まれ、雲間に浮かぶ月が放つ光が、舞い降りる巨像を確然と映し出す。

人の数倍もある巨大な体躯は、褐色の鱗と甲殻を纏い、更にそれを繋ぐ肉体は筋肉の巨塊と呼べる程に逞しく盛り上がっている。鋭利な爪を宿す前肢は、その集大成とも言える筋繊維に覆われてい

続けようとしてくる。ベルはその常人離れした行為に思わずツツコミを入れてしまう。

「ちよつと！？ 今はそんな事、話してる場合じゃないでしょ！？ ちゃんと狩猟に集中しなさいよ！？」

「吾輩には今の話の方が重要なのだ！ ベル殿、貴殿にも確約して頂きたい！ ルカ姫をパルトー王国に帰国させる事を！」

「あんた死ぬ気なの！？ 相手は話しながら戦える相手じゃないのよ！？ テイガレックスなのよ！？」

「——貴殿らが確約するまで、吾輩は貴殿らの敵として狩猟に臨む！ さア、返答をお聞かせ願おうか！！」

頑として譲らないゲルトスに業を煮やしたベルは、弓を構えて走りながら叫び返す。

「わーかったわよッ！！ ルカ姫を国に帰す手伝いをすればいいんでしょ！？ 約束するから真面目に戦いなさいッ！！」

——その言葉は、ザレアの心を深く決った。

茫然自失の態で狼狽^{てい}える仕草を止めたザレアは、ベルを見つめて凍りついていた。

「ベル……さん……？」

その声は、ベルには届かない。

吹雪は止んだと言うのに、届く事は無かった。

07・ザレアの正体（後書き）

ザレアの今まで明かされなかった過去が少しだけ明るみに出ます。
ゲルトスの強さはG級だと思って頂けたら、と思います。

ここで閑話休題。

私は思うに、ティガレックスにはランスで挑むべきだと思うんです
（藪から棒に

と言うのも、何故かランスで奴に挑むとかなり楽に倒せた記憶があるからです・・・

今は大剣縛りなので使っていませんが、昔はランスで並み居るティガレックスをフルボッコに・・・若干誇張が含まれてますがw

ティガレックスで詰まった方、ぜひ一度、ランスを使ってみて下さい。ガード突きだけで倒せたりする事がありますので。

・・・単に武器が高性能過ぎただけかも知れませんが、ランス使っても無理じゃん！！と言われても仕方ないのですが・・・念のため。悪しからずです。

次話“誤解と和解”・・・お楽しみに♪

08・誤解と和解

ティガレックスを相手に立ち回るのは困難を極める。それは彼が、他の飛竜よりも何倍も動きが機敏で、隙を見出す事が難しいためだ。そのため、腕の立つ獵人^{ハンター}ですら手を焼く、出来る事なら戦わずに済ませたい飛竜でもある。

その突進を食い止めていたゲルトスは、ベルの約束の言葉を聞いて、頭具^{ヘルム}の奥の口唇を満足気に歪める。

「その契り、嘘偽りではあるまいな!? その場凌ぎの嘘なら、ただでは済まさぬぞ!!」

「ル力姫を帰国させりやいいんでしょ!? 約束するって言ったじゃない! だから早くそいつをどうにかしなさいッ!」

「ふんっ、心得た!」

ゲルトスは力を緩め、ティガレックスの突進に体を委ねる。ティガレックスは突如として動き出した事を、ゲルトスの力が限界に達したためだと誤認し、今が好機と噛みついてくるが、ゲルトスはその動きを完全に予測——大きく開いた口の内側へ向けてグラビモスのランス——重槍グラビモスを突き出す。一刹那に繰り出された攻撃に、ティガレックスは驚くと同時に怯み、思わず踏鞴^{たたら}を踏んで悲鳴を奏でる。

「その契り、確^{しか}と承った! 為れば、全力を以て此奴を屠らせて貰おう!」

意気揚々と告げるゲルトスに、調子のいい奴、とベルは苦笑を滲ませて口の中で呟く。

ハートショットボウワンに強撃ピンを装填し、矢を番えつつティガレックスの横合いへと向けて駆けて行くベル。正面に立つのは危険だと先刻知らされたばかりだ、出来る限り奴の脇から攻撃を仕掛けねば。

フォアンはベルと真逆——ベルがティガレックスに対して左側へ

向けて走ったのに対し、右側へ向けて駆け抜けて行く。彼も、ティガレックスに真つ向から攻撃を仕掛けるつもりは無いらしい。

ティガレックスは初撃をかましてきたゲルトスに狙いを澄まし、再び突進を行う。単調な動きではあるが、速さに加えて臂力^{パワー}も、他の飛竜を圧倒するものだ。ゲルトスでなければ、即死していても何ら不思議ではない。

ゲルトスは再び盾を構える——訳ではなく、ティガレックスを見つめ、その頭頂目掛けて鋭い突きを放つ。放たれた突撃はティガレックスの額を貫き——火属性が付加されていた槍の効果により、貫かれた傷口から炎が噴き出る。まさかのカウンター攻撃にティガレックスは再び悲鳴を上げ、踏鞴を踏む。無論、ゲルトスは無傷のままだ。

ベルは弦を引き絞りながら思った。——実力が違い過ぎる……ッ！と。

思いつつ、矢を放つ。——放たれた矢はティガレックスの胸を貫く貫通矢だ。更に強撃ビンの効果で威力が増し、ティガレックスの体に小さいながらも風穴を穿つ。

ゲルトスの一撃で怯んだティガレックスの背後へと回り込んでいたフォアンは、抜き放ち様に斬りかかるが、——敢え無く硬質な鱗に刃が弾かれてしまう。だが、切断こそ出来なくとも、フルミナントブレイドには雷の属性付加がある。刃が叩きつけられた瞬間、電流がティガレックスの総身に流れる。

突然湧いたゲルトス以外の者共の攻撃に、怒りを露にするティガレックス。前肢を力強く雪原に踏み下ろし、力を内側に溜め込むように体を丸め込む。

「回転攻撃が来るぞ！」

ゲルトスの怒号が走った瞬間、フォアンはフルミナントブレイドを盾代わりに構え——ティガレックスがその場でぐるりと自転する攻撃をマトモに受け、弾き飛ばされる。踵を雪原に擦らせながら後退したフォアンは、辛うじて踏み止まって無事を示す。

ティガレックスはゲルトスよりもフォアンの方が与し易い^{くみ}と認識したのか、正面にフォアンが来るように足踏みし、——刹那に突進を始める。

「く——ッ」

ティガレックスの猛進を、大剣の盾では防ぎきれないと即座に判断し、大剣を一度背中に戻して、——全力疾走を始める。ティガレックスの横合いを抜けるように全力で駆け抜けるが、衝突は免れ^{まぬが}ない——その瞬間、フォアンは前方に飛び込むようにして体を投げ出し、雪原を転がった。ティガレックスの牙はその足許を掠め、何も無い中空を噛み屠る。

間一髪避けたフォアンを見て安堵の吐息を漏らすベル。一步間違えば即死に至るであろう一撃一撃に、気が気で無いのである。

ベルは再び矢を番えてティガレックスに照準を合わせようとして、
「——うにゃああああああんッッ！」

——アイルーの悲鳴のような声が雪原に木霊した。

何事かと振り返ると、ザレアがアイルーフェイクの目許に腕を当てながら全力疾走で鍾乳洞へと逃げ帰って行く様が見て取れた。突然の出来事に何が起こったのか理解が遅れるが、やっとの事で分かったのは——ザレアが敵前逃亡を図った？　と言う事実。

「ちょッ！？　どうしたのよザレア！？」

驚きながらも、ベルは自分の足がザレアを追って走り出すのを感じていた。彼女を一人にしておいてはいけない——それが本能で分かったのだ。

フォアンも大剣を背負ったまま、鍾乳洞の入口へと向かって駆け出す。仲間の異常事態に、刹那に体が反応するのは彼らしいと思うベル。

「ぬう！？　どこへ行かれるのですか！？　姫様！！」

同じく、突然の出来事に驚愕の色を隠せないゲルトス。——だが、眼前に再びティガレックスが牙を剥き出して突っ込んで来る。即座に三人を追えず、「ええいッ、竜風情が邪魔をするなア！！」と怒

号を張り上げながら、その頭へ向けて突撃を放つ。

その間にザレアは鍾乳洞の入口に辿り着くと、どこから取り出したのか、打ち上げタル爆弾Gを取り出し、あるう事が入口に設置し始める。

「ちよつと！？ あの子つたら何してんのよッ!？」

ベルが突っ込みつつも入口の前に辿り着くと、——打ち上げタル爆弾Gが鍾乳洞の入口天井へと飛んでいき、——爆発。鍾乳洞の脆い部分の岩盤が崩落を始める。

ベルとフォアンは崩落の始まった入口を駆け抜けて行く。頭から大量の氷結晶やら石ころやらが落下——頭や肩にがつんがつん落ちてきて、「いたたたっ！」と喚きながら鍾乳洞の中へと入り込む。

——刹那、ががんつ、と大きな崩落音が鳴り響いたかと思うと、

——鍾乳洞と雪原を繋ぐ出入口が大きな岩盤に塞がれ、道が閉ざされた。

ザレアはそれを確認する事も無く、更に泣きながら走って行くが、フォアンが腕を掴んで食い止める。

「どうしたんだ？ ザレア。まずは落ち着いて、これでも飲め」

そう言って、泣きじゃくるザレアの手に元氣ドリント、加えてストローを差し出すフォアン。ザレアは アイルーフェイク を片時も外さないで、元氣ドリントを飲む際はストローを使うのだ。

「うにゃあああんつ、うつ、ひぐつ、にゃあ……にゃああ……」

鳴咽おえつを漏らしながらその場に座り込み、意味も無く アイルーフェイク の目許を擦り続けるザレア。

泣きじゃくり続ける少女を見て、二人の獵人は顔を見合わせて肩を竦める。

ザレアの正面に座り込み、抱き締めるようにして背中を撫で始めるベル。

「もつ、あんたって子は毎回毎回滅茶苦茶して……今度はどうしたの？」

優しく声を掛けてくるベルに、ザレアは　アイルーフェイク　を横に振りながら、嗚咽混じりに声を発する。

「にやぐっ、にやひっ……ベルしゃんがっ、オイラに国に帰れってっ」

「はあ？　あたしがいつそんな事言つたのよ？」

ザレアが一人、鼻をグズグズ^{すす}吸る音だけが、鍾乳洞に響いている。「ずずっ、……あにや？　べ、ベルしゃんは嘘を吐いてるにやっ！　さっき、オイラは確かに聞いたのにや！　ベルしゃんが、オイラを国に帰す約束をするのをっ！」

「……とか言ってるけど、フォアン、あたしそんな事、言つた？」

含み笑いを込めてフォアンに振り返るベル。フォアンはそんなベルにちよっぴり意地の悪い微笑を浮かべて、簡潔に返す。

「いや、一言も言つてないな」

「うっ、嘘にや！　二人揃つて、オイラを騙そうと——」

「嘘は吐いてないし、あんたを騙そうともしてないわよ？」

意地の悪い笑みを浮かべているベルに、ザレアは困惑しきつた顔で「にや？　にやにやっ？」と何を言っているのか分かっていない風に、ベルとフォアンの間を何度も視線が行き来する。

そんなザレアの様子を見つめながら、　アイルーフェイク　を撫で、ベルは柔らかに微笑んだ。

「あたしが約束したのは——パルトー王国のルカ姫を国に帰す事でしょ？　何でラウト村のザレアが帰らなきゃならないのよ？」

「にや……？」　ぽかん、と言葉を失うザレア。

「ザレアはルカ姫じゃないんだろ？　何でザレアがそんなに取り乱すのか、俺には分かんないな。ザレアは——ラウト村の獵人なんだから？」

したり顔で告げるフォアン。その時、やっとザレアは彼らが何を言わんとしているのか理解できた。

意味も無く　アイルーフェイク　の目許をぐしぐし拭くと、ザレアはちよっと俯きつつ、小さな言葉を漏らした。

「……ベルさんも、フォアン君も、意地悪にや！ オイラっ、オイラ……っ！」

ポカポカとベルの胸を叩き始めるザレアに、ベルは苦笑を浮かべつつ、アイルーフェイクの頭頂を撫でてやる。

「ごめんごめん、あたしも悪かったわよ。……でも、ああでも言わなきゃゲルトスの奴、絶対に真面目に狩猟しなかったでしょ？ だから……」

「ま、ベルの言い方にも問題があったけど、それはもういいじゃないか。蟠^{わだかま}りも解けた事だし、——これからどうする？」

二人の少女の肩に手を置きながら片膝を突くフォアン。ザレアをあやしなから、ベルはフォアンに視線を向ける。

「そりゃ、ティガレックスを狩らなきゃ。——てか今、ゲルトスが一人でティガレックスを相手にしてるんじゃない……？」

ハツとして青褪めるベル。ゲルトスが凄腕の獵人だと言う事は先刻の動きで分かっていたが、それでも一人でティガレックスを相手になど出来る訳が無い。このままでは死者が出てしまうのでは——？ とベルは本気で危惧したが、ザレアは泣き止むとその考えを否定した。

「ゲルトスはパルトー王国一の腕を持つ獵人だにや。——だった気がするにや！ きつとそうにや！ 多分、ティガレックスなんて一人で狩猟できると思うにや！」

「……それ、嘘じゃないわよね？ ゲルトスをこの場で亡き者にしたいがための……」

「う、嘘じゃないにや！ 本当にや！ ゲルトスは凄い獵人なのにや！ オイラ、嘘は吐かないにや！」

必死になって自分の発言を真実だと主張するザレアには、いつもどおり、虚偽や誇張の響きは感じられなかった。それに、彼女がそういう事を口にする娘でない事は、ベルが一番よく知っている。

「——なら、問題無いわね。あたし達はもう一頭のティガレックスを相手にしましょう。どうせ、洞窟は塞がれてしまってるしね」

「にやにやつ、それがいいにや！」

「了解したぜ。——もう一頭は今、^{エリア}区画1——麓の方にいるみたいだな。急げば、相手が移動する前に辿り着けるかもだ。走ろう」
「おっけ！」「にやーっ！」

三人の獵人は互いに笑みを交わし合い、走り出す。

ザレアの表情は、アイルーフェイクのせいで見えなかったが、不思議とそのアイルーが笑みを浮かべているように映ったのは錯覚か、それとも——

08・誤解と和解（後書き）

誤解と和解・・・副題のままの展開と相成りました。
と言う訳で次話では遂に彼の飛竜との対決となります。

次話“轟然たる飛竜”・・・お楽しみに♪

09・轟然たる飛竜

雪山の麓に当たる草地——エリア区画1に辿り着いた三人の獵人は、巨大な褐色の君臨者を再びその眼に捉えた。陽が落ちた世界で、月明かりが煌々とその巨像を映し出す。

相手はこちらに気づいていない様子で、ポポと呼ばれるマンモス型の草食獣を鋭利な牙で食い散らかしていた。麓の一角を鮮血に染める暴虐の王はやがて溶解を始めたポポから口を離し、嗅ぎ慣れない匂いを辿って、——小さな獵人の姿を見つけ、警戒心を露にする。雪の疎^{まば}らな草地に前肢を踏み下ろし、見上げる高さにある頭を持ち上げ、獵人を丸呑みにしてしまいそうな口を開け、——轟音を掻き鳴らす。

それが狩獵の合図だった。轟音が収束しつつある草地を駆け抜け、フォアンとザレアはティガレックスとの間合いを急速に縮めて行く。ベルも奴の正面に立たないように位置取りを調整し、ハートショットボウワンを引き抜き、強撃ビンが装填されている事を視認し、矢を番える。

ティガレックスは周囲に群がろうとする獵人二名を無視して、まずはベルに標的を絞る。大きく右前脚を振り被り、——地面を抉り取り、抉り取った土塊をそのままの勢いに吹き飛ばす。

「——いい!？」

突如として視界を覆ったのは、ティガレックスが鋭利な爪で抉り取った地面の一部。それが宙を舞って自身に向かってくるという事態に驚きを隠せなかったが、動きを硬直するのは不味いと刹那に気づき、慌てて矢を捨て、弓を提げたまま、飛翔する岩盤を躲^{かわ}すべく、横合いに抜けるようにして体を投げ出すように飛び込む。

ががんつ、と岩盤が破碎する音が後方で響いたかと思えば、細かな土塊が幾つも飛んでくる。振り返ると、草地の一部が巨大な岩盤によって形を大きく変容させていた。マトモに喰らっていたら一溜

まりも無かったのは言うまでも無い。

一撃の重みに慄然^{ぞうぜん}としながらも、ベルは口唇を引き締めて褐色の君臨者へと視線を転ずる。

ここで退いてしまえば、カラスト村の民に危害が及ぶかも知れない。獵人としてここに赴いたのだ、それだけは罷^まり通らせてはならない。ベルは無意識の内に奥歯を噛み締め、こちらに獰猛な眼差しを送るティガレックスへ再び矢を番えた。

……もう、あたしみたいな人間は、生まれちゃいけないんだ……ッ！！

弦を引き絞り、渾身の貫通矢を褐色の鱗を纏う胴へと射通す。強撃ビンの滴った矢は射線上のティガレックスの腹部を貫通し、強撃ビンの原料となっているニトロダケが衝撃により熱を放出し、傷口から炎を吐き出す。

突如として湧いた激痛に、ティガレックスは牙を掻き鳴らして怒号を上げる。流石に、ゲルトスのように一撃で相手を怯ませる事は叶わない。だが、その隙に二人の獵人が間合いを潰し、互いに攻撃を開始する。

フォアンはティガレックスの右側から更に回り込み、背後へと走り込む。その間にザレアがティガレックスの正面に立ち、手に拳大の球体の道具を握り締める。

「喰らうにやつ！」

ティガレックスが眼前に立つザレアへと大きな口を開けて前進しようとした瞬間——ザレアの手を離れた球体の道具はティガレックスの正面に飛来し——刹那、夜の闇を引き裂いて光の奔流が辺りを包み込む。

『ティガレックスを相手にする時は、閃光玉は必須なんだ』

狩獵が始まる前にフォアンが言っていた台詞である。フォアンの纏うレックスシリーズは、これから狩獵を行うティガレックスの素材で出来た防具——それはティガレックスを相手にした事がある何よりの証拠。そこでベルは彼から助言を聞いていた。

「ティガレックスをマトモに相手にするのは正直難しい。奴の移動速度、^{パワ}臂力を鑑みれば、正面切つての狩猟は無謀と言ってもいいだろうな。だから——閃光玉を使って動きを止め、滅多打ちにする。罠も有効だ。臆病者と言われようが、この方法が確実だと思うぜ」

作戦では、まずザレアが閃光玉を使い切つて、それからベル、フオアの順で使い切つていく事になった。閃光玉は一人の獵人に付き、狩場に持ち込める数は五つと制限が設けられている。後は素材玉と光蟲を調合して狩場で作成するしかない。閃光玉を使う順番が決まっているのは、使うタイミングが重複してしまうのを防ぐためだ。

閃光玉をマトモに喰らつたティガレックスは悲鳴を上げ、^{たたら}踏鞴を踏んで動きを止める。喉の奥で唸り声を発しながら、視界が使えなくなつた状態で、威嚇するように歯噛みしだす。

ティガレックスに閃光玉が効いた瞬間、フオアは奴の背後でフルミナントブレイドを抜き放ち、大剣を担ぐような体勢で動きを固め、臂力の全てを腕へ、そして大剣——フルミナントブレイドへと溜め込んでいく。

その間にザレアは草地を漁り始め、その手に大タル爆弾Gを手にとると、両手で頭の上に持ち上げ、——あろう事が大タル爆弾Gを投げ飛ばした。それにはベルも驚きを隠せず、瞠目して矢を番える手が滑つてしまう。

「アイルーかあんたはッ!？」

宙を舞つた大タル爆弾Gは弧を描いて——ティガレックスの頭に着弾。轟音が鳴り響き、爆発が闇を引き裂いて赤く輝き、爆風が辺りの雑草を揺らす。

「ギユアアアアアアアアッ!？」

悲鳴と共に踏鞴を踏んで後退するティガレックス。頭が爆発に因つて歪み、大量の血液が頭部を赤く染め上げる。

威嚇では足りないと感じたティガレックスが距離を取ろうとバックステップを踏もうとした、その瞬間。

「——どうりゃーっ！」

フォアンの溜めに溜めた大剣の一撃が、ティガレックスの尻尾に見舞われる。

尻尾にフルミナントブレイドが叩き下ろされた瞬間、刀身に組み込まれた電撃袋から大量の電流が流れ込み、ティガレックスの表面を電気が舐め取っていく。その強烈な一撃に、ティガレックスは更に呻き、——今度こそバックステップを踏んで距離を取る。

ティガレックスは度重なる攻撃に業を煮やし、全身に走る血管を膨張させ、青黒い筋が眼に見えて太くなっていく。血流が加速した事により、全身を覆う褐色の鱗や甲殻が赤黒く色を変え、その硬度を変質させていく。

これが——ティガレックスの怒り状態。激情に身を委ねたティガレックスは前肢を草地に踏み下ろし、再び顔を高く持ち上げると、

——轟声を掻き鳴らした。

びりびりと空気を震わせる轟音だったが、ベルは距離が離れていったために耳を押さえて蹲る事態には陥らなかったが——残る二人の獵人がその状態に陥っていた。そして、ティガレックスは恐らく彼らが復帰する前に突進を開始するだろう。

「目をッ——」

順番など遵守している場合ではない——そう一瞬の間に思考を切り替えたベルは、道具袋ポーチから閃光玉を取り出し、全力投球でティガレックスの正面に落ちるように投擲する。

ティガレックスの咆哮が鳴り止む一瞬、二人の獵人はベルの言葉に頷く余裕は無かったが、辛うじて目を瞑る事だけは出来た。——その瞬間、辺りを再び強烈な光が包み込み、激昂するティガレックスの眼球を焼いた。

ティガレックスは再び視界が潰された事に憤っていたが、その場から動き出す気配は無い。苛立ちを紛らすように、先刻のように右前脚を振り被り、——地面を抉って、土塊を前方に吹き飛ばす攻撃を繰り返す。だが、今の彼は視界が潰されているため、誰かを狙っ

ての攻撃ではない……避けるも何も、自分に飛んでこない攻撃など、取るに足らない。

ベルは好機を見出し、立て続けに矢を撃ち放つ。先程、ティガレックスが閃光玉により動きを封じられていた時にも五本の貫通矢を射た。強撃ビンは一本矢を撃つ度に減っていく……強撃ビンも、狩場に持つてこられる数は制限されており、最高で五十本——それも徐々に数を減らしていく。

ザレアがまたも草地を漁り始めているのを横目に、ベルは絶え間なく矢を放ち続ける。相手に攻撃の隙を与えない——そうする事で、剣士の二人も安全に攻撃を繰り返せるだろうと思つての攻撃だった。フォアンは再びティガレックスの背後へと回り込み、溜め斬りの構えを取る。——その時だった。

ティガレックスが前肢に力を込め、左半身側へ絞るように体を引き、頭を低くして構えた——と思つた瞬間、体をその場で自転させた。その行為によつて尻尾が振り回され、近くで構えていたフォアンの胸に直撃する。骨をも粉碎するような衝撃がフォアンに襲いかかり、彼は数瞬の間、宙を舞い、やがて岩壁に激突——肺にあった空気を全て吐き出し、その場に蹲る。

「フォアンッ!？」

驚きと恐怖に顔を引き攣らせるベル。そんなベルの恐怖を払拭するように、ゆっくりとではあつたが立ち上がるフォアン。フルミナントブレイドを杖代わりに、ゆっくりと両足を地面に踏み下ろす。

「かはッ、あ……ッ!」

口から漏れるのは、鮮やかな人血。それを見た瞬間、ベルの顔から血の気が引く。

折れた肋骨が肺に刺さつたのか？ そう思わせるだけの重みが、あの一撃にあつた。ベルはその心配を胸の中で噛み殺すと、一旦弓を仕舞い込み、道具袋の中から回復薬を取り出し、一気に呷る。

ベルは体のどこにも傷を負っていない。——だが、彼女の防具、フルフルDシリーズには、広域化と呼ばれる能力が備わつてお

り、回復薬などの効能を、周囲にいる仲間にも共有させる事が出来る。その能力でフォアンを助けようとしたのだ。

フォアンは体の内側から癒される感覚に気づき、ベルへと拳を振り上げ、「大丈夫だ」と合図を送る。彼の様子から、幸い致命傷ではなかったのだと悟るベル。口からの喀血^{かっけつ}は、もしかしたら口の端を切ったのかも知れない、と思い込む事にした。

「フォアン君に何て事するにゃーっ！」

叫び声が上がったかと思えば、ザレアが大タル爆弾Gを再び頭上に掲げて、ぶん投げる場面に出くわした。何の躊躇も無く大タル爆弾Gを投擲し、再度ティガレックスの頭を爆撃する。轟音と空気を振動させる衝撃に驚くベル。

「む、無茶苦茶だわ……」

ティガレックスは頭部を若干陥没させ、どこから攻撃されたのか惑乱し、再びその場で尻尾を振り回す回転攻撃を繰り返すが——近くに誰もいないため、それは空振りとなる。

ベルは再び弓——ハートショットボウワンを構え直すと、強撃ビーンが装填された矢を撃ち放つ。視界が潰されている内に少しでもダメージを与えておかねば——そう思っでの攻撃だった。

やがて、視野が回復したのか、ティガレックスは大きく首を振ると、自分に幾度と無く射撃を繰り返す弓兵の姿を両眼に捉え——猛然と突進を始めた。あっという間に距離は潰されていき、ベルは一瞬逃げるのが遅れた——と気づいた瞬間、ティガレックスの体が地中に埋まる。いつの間に仕掛けたのか、そこには落とし穴と言う畏が構えていた。

「今の内にゃー！」

ザレアの高らかな宣言を聞きつつ、ベルは助けられたにも拘らず、呆れた表情を隠せなかった。

「ザレア……時折あんたが恐ろしい存在に思えるのは、気のせいなの……？」

独り言を漏らしつつ、すぐに戦闘状態に思考を切り替えるベル。

落とし穴に嵌まったティガレックスは上半身をのたうち回し、精一杯足掻いているが、すぐに脱け出す様子は無かった。戦線に復帰したフォアンは背中に回り込み、再び溜め斬りを行うべく、担ぎ込むようにフルミナントブレイドを構え、力を蓄えていく。

もうベルも驚かないが、ザレアが草地を掘り返して大タル爆弾Gを取り出し、ティガレックスの頭の近くに二つ鎮座させると、小タル爆弾Gを設置して走り出す。

そして三度、轟音と灼熱の轟風が巻き起こった。フォアンはその爆風をマトモに受けたにも拘らず姿勢を変えず、渾身の一撃をティガレックスの背中に叩き込む。――堅牢な甲殻に弾かれるが、叩き込んだ瞬間、ティガレックスの総身を焼く電流が走る。

――と、ティガレックスの姿が掻き消える。見ると、天高く跳び上がって、落とし穴を脱したようだった。

重力に縛られて落下してきたティガレックスは、明らかに疲弊していた。頭部は鮮血で染め上げられ、動きが若干鈍くなったように思える。

ここで仕留める――そうベルが貫通矢を放つべく、弦を引き絞る――と、ティガレックスは前肢に力を込め、その強靱な筋肉を用いて跳び上がる。走る事に特化した前肢を有するティガレックスは飛翔ではなく、跳躍によって狩場を移動する。遙か上空に姿を消す褐色の君臨者を見送り、ベルはひとまず安堵の息を漏らした。

「――そうだ、フォアン！ あんた大丈夫なの！？ 尻尾をマトモに喰らったみたいだけど……」

その事に気づいたベルは、慌ててフォアンに駆け寄る。フォアンはいつもの朗らかな微笑で、心配げなベルに応じる。

「平気さ。レックスシリーズの防御力はかなり優秀だからな」

「でも何か、胸具メイが陥没してるように見えるんだけど……」

「大した事は無いさ。アネさんに直して貰えば事足りる」

「血も吐いてるし……」

「口の中を切ったんだ」

「顔色も何だか悪そうに見えるけど……」

「夜だからさ」

全ての問いかけに笑顔で返すフォアン。ベルは何を言っても無駄だと悟ると、道具袋の中から回復薬を取り出し、それを呷った。怪我をしてなくても、全員の体が少し癒される。

「……もしあたしの許可無く倒れたら、許さないから。——分かったわね!？」

フォアンの胸元を人差し指で突きながら宣言するベル。フォアンは穏やかな微笑を浮かべて、敬礼を返した。

「了解です、隊長」

09・轟然たる飛竜（後書き）

と言う訳で対轟竜戦でした。

未だに狩猟シーンは苦手です・・・ぐぬぬ。

次話に狩猟完結編は持越しです、悪しからず。

次話“ 獵人として、仲間として ”・・・お楽しみに♪

10・獵人として、仲間として

ティガレックスが逃げ込んだ区画^{エリア}は、鍾乳洞の中でも、飛竜が休憩などに用いるであろうちよつとした広さのある広間だった。その上部を繋げている通路から、ティガレックスが眠って回復している姿を確認する。

「やっぱり起こすなら、ダメージが多い攻撃で起こした方が効率的よね」

「勿論にや！　と言う訳で、爆弾を運ぼうにや」

「やっぱりそうなるのね……」

下の広間に下り立つと、ザレアが隠していた大タル爆弾Gを六つ取り出し、それぞれベルとフォアンに二つずつ渡す。三人で爆弾をティガレックスの周囲に設置すると、ベルが矢で起爆させる。

——鍾乳洞を揺さ振る轟音に、ティガレックスの悲鳴が重なる。

爆風が鳴り止むと同時に、ティガレックスが猛然と突進を始める。手狭な鍾乳洞では躲す行為の難易度が跳ね上がる。ベルは弓を構えたままティガレックスが眼前に肉薄した瞬間、横合いに抜けるように前転する。ち——ッ、と肩がティガレックスの鱗に接触し、フルフルDの肩の部分が容易く裂ける。

間一髪の回避に安堵の息を吐く暇は与えられなかった。ティガレックスはガリガリと凍りついた地面を鋭利な爪で掻きながら方向転換し、再びベルへと向けて突進を開始。距離が一瞬で殺される。

「まず——ッ」

ティガレックスに轢^ひかれる間際、鍾乳洞に網膜を焼くような鋭い閃光が走り抜ける。ザレアが機転を利かせて閃光玉を放ったのだ。タイミングはギリギリ——ベルの眼前で目を焼かれたティガレックスは、踏^{たたら}鞆を踏んで動きを止める。あと一瞬でも遅れていたら、ベルは奴の巨軀に押し潰されて轢^{れきし}死していただろう。

ベルはあまりの恐怖に戦意を喪失しそうになったが、ティガレッ

クスに纏わりつくように駆け寄る二人の獵人^{ハンター}を見つけて、萎えそうになっていた心を再び奮い立たせる。

フォアンは視界を閉ざされたティガレックスの背後に回り込み、厄介な尻尾を断絶せんと溜め斬りの構えを取る。今度は頭ではなく、地面を抉り取る程までに鋭利な爪を破壊しようと、前肢の爪先部分に大タル爆弾Gを設置していくザレア。

「この一撃で——断つッ!!」

溜めに溜め込んだ力を放ち、ティガレックスの尻尾にフルミナントブレイドを叩き下ろすフォアン。——すると、尻尾が遂に切断され、ティガレックスは総身に走る電流と、断たれた尻尾による激痛に苛まれ、前に倒れ込む形で悶絶する。

同時に、ザレアの仕掛けた爆弾が起爆し、更なるダメージをティガレックスに刻み込む。

爆風が止む頃には、瀕死にまで至ったティガレックスが視界を取り戻し、殺意のこもった眼差しで見つめていた。

頭を陥没され、爪を破壊され、尻尾を切断され、総身を電流に焼かれ……それでも尚、ティガレックスは獵人に屈する事無く、威容を誇っていた。自身に流れる竜としての血が、敗北を頑として認めようとしなかった。

だが、肉体は既に限界を迎えていた。王者としての精神を誇つていようと、その膂力^{ねいりき}は根刮ぎ奪われ、立っているのもやっとだと言ふ事が、気配で伝わる。

以前ザレアが言っていた事が、何と無く分かった気がした。ティガレックスは、もう息絶える寸前なのだと。

「これで、終わりにしましょう——ティガレックス!!」

ベルの咆哮に応じるように、ティガレックスが最後の力を込めて突進を開始する。先程までの突進に比べたら力の感じられないものだったが、それでも獵人を轢死させるだけの力はこもっている。

それに相対するように、ベルは正面から弓を構える。渾身の力を込めて弦を引き絞り、ギリギリまで引きつけて——

ティガレックスが巨大な口を開けてベルを丸呑みにする直前、ベルの放った矢が脳天を貫き——生命の源を刈り取った。

慣性の法則に従って地面を滑り込み、——ベルの直前で動きを止めたティガレックスは、意志の光に満ちていた双眸を虚ろにしている——やがて濁った闇を滲ませると、命の灯が消えた。

一つの狩猟の幕切れの合図だった……………

ティガレックスの体から素材を剥ぎ取り終え、ベル達はこれからどうすべきか悩んだが、迂回路を通って、ゲルトスとティガレックスを置き去りにした区画へと向かう事にした。

雪原は天候が回復したようで、吹雪は鳴り止んでいた。夜の闇を月光が優しく照らしたす白銀の世界は、不気味な程に静まり返っていた。三人の獵人が深雪を噛む、ぎゅむ、ぎゅむ、と言う足音以外の音が絶えていた。

「……………まさか、ゲルトスが死んでるなんて事は無いわよね……………」
訝しげにザレアを見つめるベルに、ザレアは「そそつ、そんな事は無い筈にやつ！」と慌てて否定するが、その慌てようが更なる不審を生む。

「いや、ゲルトスは生きてるな」

そんなベルの疑心を、フォアンは真顔で否定する。何故そんな事が言えるの？ と言う視線を送ると、彼はいつもの表情に僅かに緊張の色を上塗りするだけで、応えようとはしなかった。

そのフォアンの沈黙の意味を、ベルはすぐに思い知る事になる。

区画6——ゲルトスとティガレックスが残されたその区画には、ティガレックスとゲルトスの姿が確りしっかと見受けられた。

ティガレックスがゲルトスの死肉を貪ほろむっているのか——違う。まだ戦いが続いているのか——それも違う。

ティガレックスは、ゲルトス一人の手で、討伐されていた。

倒れて動かないティガレックスの体には、無数の刺し傷が刻まれている。それが全てではないにしろ、致命傷になったのは言うまでも無い。白銀の世界を鮮血色に染め上げ、ティガレックスは確かに往生していた。

その鮮烈な世界の中心に、別れた時と同じ姿で、ゲルトスは厳然と立っていた。

「……本当に、ティガレックスを一人で狩ったって言うの……!？」
ベルはその事実気づいた瞬間、言葉を失いかけた。手練の獵人でさえ手を焼くティガレックスを、獵人が一人で狩獵を完遂するなど……あまりに常識を逸脱しているように、ベルは思わずにいらなかった。

だが、現実はその以外の事実を頑として受けつけなかった。

ゲルトスはゆっくりとした所作で三人の獵人の前へと歩み出る。

「逃げずに戻って来たと言う事は、姫様に帰国の意志があるとお見受けして宜しいのですな？」

静かな、そして厳かな声。それは質問の形式こそ取っていたが、有無を言わさぬ意志を感じさせた。

だが、そんな空気に物怖じせず、ザレアは胸を張って応じる。

「オイラはルカ姫じゃないのにや！ ラウト村のザレアだから、帰る必要は無いのにや!!」

ザレアの発言に、奥歯をガリ、と噛み砕くような音を響かせると、激情を抑え切れず、ゲルトスが低く恫喝する。

「まだその様な世迷言を申されるおつもりか、姫様……ッ!? ——
| こうなつては致し方ない。力尽くでも戻って頂きますぞ、姫!」

新雪を噛みながら、ゆっくりと近寄って来るゲルトスの前に、二人の獵人が立ち塞がる。

「説き伏せられないと分かったら実力行使って訳? ——ザレアは渡さないわよ」

「幾らゲルトスが一流の獵人でも、これだけは譲れないな。……それに、獵人は人に武器を向けてはならない規則を忘れたとでも言う

「何か？」

「……契約を破棄するつもりか？ ベル殿。嘆かわしい限りだ……契約を貴び、依頼を完遂するのが獵人としてのあるべき姿だと思っていたが……」

嘆息混じりに頭を弱々しく振るゲルトスに、ベルはにや、と意地悪な笑みを浮かべる。

「あら？ あたしはルカ姫の帰国の手伝いをするとは言ったけど、彼女はルカ姫じゃない——ラウト村のザレアだから、その話は筋違いじゃない？」

「減らず口を叩きおつて……ッ！！ どうしても引かぬと言つなら、貴殿らにも相応の覚悟があると見做し——^{みな}実力行使の対象と認識させて貰うが、——構わぬな？」

告げた直後、ゲルトスは重々しい防具を鳴らして、ティガレックスにも負けぬ突進を繰り出す。武器は抜いていない——ただのタックルでしかない。

ベルもフォアンも武器を雪原に投げ捨て、真っ向から対峙する。まずはタックルを避け——

「——ぐふうッ」

加速した体当たりはティガレックスのそれを凌駕した速さでベルへと肉薄し、銃士用の防具を抉るように、ゲルトスの防具の肩の部分が腹部に激突する。強烈な一撃に、ベルは体が宙を舞う感覚を味わった後、雪原の上を二転三転した。重過ぎる一撃に体が悲鳴を上げ、呼吸が肺から全て吐き出され、一瞬だが呼吸困難に陥った。苦しくて視界が明滅し、立ち上がるうにも足が小鹿^{ケルビ}のように震え、手を突いても立ち上がれない。

「ベル——ッ、ごアッ」

ベルに駆け寄ろうとしたフォアンは、ゲルトスの軽快な回し蹴りによって吹き飛ばされる。グラビモスの防具には相応の重量がある筈なのにまるで銃士用の防具のように機敏な動きをするゲルトス。加えて、彼にはティガレックスを一人で討伐せしめる技量と膂力が

ある。一端の獵人が相手では、力量の差は歴然だった。

たった一撃で立ち上がれない程のダメージを負うなんてあり得ない。しかも、相手は獵人とは言え人間であり、モンスターではないのだ。あまりに常人離れし過ぎていると言わずにはいられない。

ゲルトスは跪いたまま立ち上がれそうに無い二人の獵人を見下ろした後、ザレアに視線を転ずる。

「姫様。これ以上、無理を申されなくて頂きたい。彼らをこれ以上苦しめぬためにも、どうかこれにてご帰国願いたい。姫様は痛い目を見ないと分からない程、愚かではないと、吾輩は信じておりますぞ」

「にや……にや……っ」

倒れ臥す二人の獵人を見て狼狽を隠せないザレア。彼女が今にも泣きそうなのは、今までの付き合いでよく分かる。だからこそ――

「……ほう。まだ立ち上がるか。吾輩の一撃に耐え得るとは……中々見込みのある獵人だな」

「……ッ、ザレアを、泣かすんじゃないわよ……ッ、あんた、それ以上ザレアを怖がらせたら、許さないからね……ッ!!」

立っているのがやっとだが、それでもベルは負けたくなかった。ザレアを困らせるような奴に、負ける訳にはいかなかった。

「……全くその通りだぜ、ベル……。おい、ゲルトス。それ以上ザレアに近づいてみる、ぶっ飛ばすぞ……!!」

それは、初めて聞くかも知れない、フォアンの敵意に満ちた声。彼も生まれたての小鹿のような足取りで、何とか立っているようだった。

二人の懐く意志は同じだった。ただ彼女を――ザレアをム力つく奴から解放する事、それだけ。

そのためなら、例え瀕死でも立ち上がってみせる。

ゲルトスは二人の獵人を見据え、頭具ヘルムの中でひっそりと口唇を歪めた。

「その意気や良し。吾輩も全力を以て相手になろう」

五分と経たずして、二人の獵人は雪原に倒れたまま動かなくなつた。

打撲の後で満身創痍になつた二人は、完全に伸びていた。死んではいないが、完全に意識を無くしている。このままにしておけば、何れ凍死するのは明白だ。

その雪原で、ザレアは泣きじゃくっていた。ベルとフォアンの体を抱き締めたまま、声を殺して泣き続けていた。

その様子を近くで眺めていたゲルトスは、若干呼吸を荒くしつつも、落ち着いた様子でザレアに語りかける。

「……良い、仲間をお持ちになられたようですな、姫様」

ゲルトスの言葉は届かない。届いたところで、ザレアはその声を遮断した。

ザレアが反応しないのを承知の上で、ゲルトスは言葉を続ける。

「何年振りですか、これ程までの氣骨を持った獵人を見るのは。

……そう、もう三年になりますか。強い意志を持つ獵人は、それだけで類を呼び寄せるもの……故に姫様も、彼らに惹かれたんでしよ
うな」

ゲルトスの独白は、静かな雪原を滑るように流れていく。

「……吾輩は騎士です。卑怯な真似は出来る事ならしたくありません。どうか姫様、ご帰国なさつて下さい。これ以上、吾輩は自らの手を汚したくないし、姫様にそれを見られたくございませぬ。……ご理解頂けますな？」

ザレアは泣いていた。自分のためにここまで手を尽くしてくれた獵人は、師匠以外にいなかったから。だからこそ——これ以上、彼らに迷惑を掛けてはならないと、自分を閉ざそうとしていた。

——やがて、雪山に陽光が射し込み、辺りを明るく照らしだす。
そこにはもう、誰の姿も残っていなかった。

10・獵人として、仲間として（後書き）

ちよっぴり熱い（？）展開の今話。

獵人として遥かな高みに君臨せしゲルトスに敗北を喫した二人。
そんな二人の行く末は、そしてザレアの運命は——！？

次話“ル力姫”・・・お楽しみに♪

11・ルカ姫

ちち、と小鳥の囀る声さえずりが遠くに聞こえる。

ぼんやりと天井を見上げていたベルは、やっと自分が自室のベッドで寝ている事に気づいた。朝陽が窓から射し込み、暖かな空気を部屋に漂わせている。鼻を衝くのは、薬草と雪山草の匂いだった。

「あたし……」

気を失う前に何をしていたのか思い出そうと、起き上がろうとして——節々が悲鳴を上げ、「——っ」と短い呻き声を発してしまう。ゆっくりと体を起こすが、全身が軋みを上げて、全力で押さえようとしてくる。

ベッドの上で上半身だけを起こして体を見下ろすと、——全身に包帯や湿布が巻かれていた。試しに脇腹に触れてみると、——刺すような激痛が走って顔を顰しかめてしまう。

全身を鈍痛と倦怠感が纏い、息をするのも辛かった。ここまで酷い怪我を負うのは、獵人ハンターを初めて間もない頃以来だ。あまりの痛さに顔は顰めっ放しだった。

何が起こったのか思い出すために唸り声を上げながら小首を傾げ——ゲルトスの事を思い出した瞬間、その表情が驚きに変わる。

「あたし、雪山で意識を失ったんだ……。——ザレアは!？」

慌ててベッドから降りると、——激痛が走るのを無理矢理無視して酒場へと向かう。幸い、インナーだけは着ていたので、裸体を晒す事は無かった。

酒場に何とか辿り着くと、扉を肩で押し開け、そのまま倒れ込む。「——ベルさん!？」 まっ、まだ寝てないといけませんよ!？」

慌てて駆け寄ってきたのは村長のコニ力だった。昼食を摂っていたのか、口許にパンクズが付いている。

「……………は、」

「まだ安静にしてない! ……え? 何か言いました?」

「ザレア……は……？」

痛む節々の悲鳴を殺して、ベルは何とか質問を発する。苦しげに漏れる声には、今にも泣き出しそうな響きがこもっていた。

「ザレアは……どこ……？」

ベルは酒場に向かう前に、ザレアの部屋に寄っていた。そこで、彼女は見た。

「どうして……ザレアの部屋には、何も無いの……？ 武器も、道具も、——爆弾もッ……！」

ベルの家である小屋の隣にある小屋のザレアの部屋は、人が生活していたとは思えない程、何も無かった。収納箱ボックスの中には何も入っていないし、生活に必要な物も一つも無い。そして、彼女の象徴たる爆弾ですら、一つも見受けられなかった。

「ザレアは、どこ行つたのよ……ッ……！」

コニカの胸倉を掴み上げ、今にも涙が零れそうな青色の瞳を見開き、悲痛な声を上げる。

そこに、酒場の扉が再び開き、外からフォアンが姿を現した。彼もベル同様、全身に包帯と湿布を貼りつけ、満身創痍の様相だったが、足取りは確りしており、表情もベルに比べたら幾分か落ち着いていた。

「フォアンさん！？ あなたもまだ安静にしてないといけないのに……っ……！」

「——なあ、どうして村中を囲っていた爆弾が一つ残らず消えてるんだ？」

その言葉に、ベルは更に表情を曇らせた。そうだ、ザレアは信管が抜けているから安心だと言って、村中に爆弾を置いていた。それが——今は一つも無い……？

ベルは今にも泣きそうな顔のまま、コニカに詰め寄る。

「村長、教えてよッ。ザレアは、どこに行つたのよ……！」

「えっと……それは……」

口ごもるコニカに、ベルは更に迫ろうとして——

「ただいまにゃーっ！」

元気で、快活で、一番聞きたかった声が、背後から響いてきた。

ベルは呆然とした面持ちで振り返り、フォアンも驚きを隠せない様子で彼女を視界に捉え、二人の視線の先にいた少女は二人を見て感動したように声を上げる。

「ベルさんっ、フォアン君っ、やっと目覚めたにゃねっ！？ もう、オイラ心配で心配で……」

ぐしぐしと アイルーフェイク の目許を擦る少女——ザレアを見て、ベルはぽかーんとしたまま、やっとの事で声を発する。

「……あれ、ザレア？ あんた……あれ？ 何であんた、ここにいるの？」

「がーんっ、酷いのにゃっ！ オイラはラウト村専属の獵人にゃよ！？ ここにいるのが当たり前なのにゃ！！ さっきまでいなかったのは、アイルーの隠れ家に行つて、傷に効く薬を貰つて来ていたのにゃ！」

「え、あ、そうなの……って、あれ？ 何かおかしくない？」

ベルが小首を傾げながら不思議がつっていると、フォアンが肩にぽん、と手を置いた。振り返ると、彼は安心したように顔を綻ばせていた。

「いいじゃないか。ザレアがここにいるんなら、俺は何も言う事無いぜ？」

フォアンの尤もな台詞に、ベルも徐々に表情を崩していく。顔を隠すように俯くと、「良かった……」と鼻声で呟いたのが、その場に居合わせた者全員の鼓膜に届いた。

「――良くは無い!!」

突如、酒場に轟いた怒声に驚くと、ザレアの背後に渋い顔をした三十代ほどの男が立っていた。赤髪を短く刈り揃えた、彫りの深い顔立ちの男は、苛立ちを隠せない様子で一同を見つめていた。

「えっと……もしかして、ゲルトス……なの？」

頬を引き攣らせつつ、壮観な男を指差すべし。筋骨逞しい男は確りと首肯する。

「いかにも、吾輩はゲルトスである!! 姫様がご帰国なさらぬ以上、吾輩もおいそれと帰国できる状況ではない!! どうしてくれる!？」

「いや、どうしてくれるって言われても……」

厳つい目つきで睨み据えるゲルトスに、少し怯えつつ視線を逸らすべし。

ゲルトスは肩を怒らせていたが、すぐに悄然と肩を落とした。

「……これでは吾輩の面目は丸潰れである……国中で笑いにされるのだ……とほほ……」

俯くゲルトスの背中には哀愁が漂っている。

どう慰めていいものか悩んだべしだったが、取り敢えず確認のため、大事な質問を投げかけてみる。

「えっと……ザレアはもう連れてかないのね？」

「……貴殿らが申したのであるう？ 彼女はラウト村のザレアであつて、パルトー王国のルカ姫ではない――と」

「そうだけど……あんた、意外と話が分かる奴なのね」

少し親近感が湧くべし。だが、ゲルトスは哀愁を漂わせて項垂れたままだつた。

「ああ……どうすればいい!? このままでは国は無法地帯と化し、何れは滅亡してしまうのだぞ!? 吾輩はパルトー王国最大の汚点として生きていかなばならなくなるのだぞ!? そ、そんなの嫌だ

アアアア——ツッ!!」

ア—ツ、と泣きながらその場に四つん這いになり、地面を激しく殴りつけるゲルトス。まるで駄々っ子のような豹変振りに、流石のベルも引いてしまった。

「うーん、流石にこのままじゃゲルトスが可哀想過ぎるわね……何か代案を出すべきだと思わない、皆？」

と言いながらベルが視線を向けたのは、この場に居合わせた者達——フォアン、ザレア、コニカ、そして遠くからこちらをニコニコ見つめているティアリイである。

「あのう……話がよく分からないのですが……何の話なんでしょう？」

キョトン、とした様子で小首を傾げるコニカ。ティアリイは自分にも水が向けられているにも拘らず、その場から動きだす気配は無い。

手短にゲルトスが抱える問題を説明すると、コニカは「なるほどお」と手を打って頷いた。

「だったら、替え玉を用意したらどうでしょうか？」

「替え玉？……てーと、姫様の代わりになる人物を、姫様に仕立て上げる訳？」

「はい♪ それなら、パルトー王国の人も、気づかずに姫様だっと思ってくれると思いますよ♪」

気楽に案を出すコニカ。だが、中々面白いかも知れないと感じたベルは、その案で行こうと結論を出した。

「それじゃあさ、ゲルトス。姫様の特徴を言つてよ。それに合う人物を、あたし達も街に出て探すからさ」

「……だが、それだと相手の許可を得なければなるまい。それに、いつボ口を出すかも知れぬ一般人には、些か難があり過ぎると思うのだが……」

「そこはほら、色々と調教すればいいじゃない♪」

「今、サラッと恐ろしい事を申されなかったか？」

「で、姫様ってどんな髪型なの？ 色は？」

ベルの無理矢理な話の持っていき方に不服そうだったが、ゲルトスは瞼を下ろすと、瞼の裏側に映る眉目麗しい姫様を思い浮かべる。「髪はどんな黄金にも負けぬ金色の輝きと、絹を思わせるサラサラの髪質を持ち、更にそれらを引き立たせるプリンセスロールと呼ばれる髪型であつた」

「……………。それじゃあ、顔立ちは？ あと、目の色とか」

「神々しいまでに整いきつた美少女然とした顔立ちである。もう姫様より美しい女子は二人といまい。瞳は澄み渡る青空を思わせる青色だ。肌は雪のように白く、まるで陶磁器のような美しさが備わつておる」

「……………。その、無駄な装飾どうにかならない？」

「ふぬ？ 何の事である？」眉根を寄せるゲルトス。

「…………いや、やっぱいい。…………えーと、因みに体つきとかは？」

「スラリとした細身だが、決して華奢とは思えなかったな。筋肉が最低限に付き、女性としての美しさを内包した肉体は、まさに完璧と言つべきプロポーションだった…………」

取り敢えずゲルトスの無駄な装飾を省いた特徴を羊皮紙に列記していったベルは、それを見て、どんな少女なのかを連想し…………

「…………あれ、何かこの姫様、あたし知ってるような気がする…………」

難しい顔で呟くベルに、ザレアが アイルーフェイク を隠すように慌てだす。

「おつ、オイラじゃないにやつ、オイラは違うにやつ、オイラじゃ…………」

「いや、あんたじゃなくて。…………うん、何か凄く身近にいる気がするわ。これって…………」

ベルが顔を上げて頭の中に浮かんだ人物を告げようとした時、酒場の扉が開いた。

「お姉様ーっ！！ フォアン様ーっ！！ 御機嫌ようっ！！」

ばぁーんつ、と扉を開け放って現れた少女——ではなく少年は、エルフィーユ——ではなくエルトラン——通称エルは、いつもおり女性用の防具を身に纏って現れた。

その姿に、酒場に居合わせた全員が気づき、具に観察くさんしていく。

金色の髪は、プリンセスロール。瞳はベルと同じく青色。男の子だが、女の子にしか見えない整った顔立ち。肌は透き通るように白く、細い体つきの割には華奢と言う感じがしない。

「る——ルカ姫!？」

「は、はいいいいい——ッッ!？」

ゲルトスの驚愕の一言とベルの絶叫が、酒場に高らかに響き渡った。

11・ルカ姫（後書き）

シリアスなんてなんのその！

【ベル】の成分の半分（半分以上？）はギャグで出来ています。

ゲルトスがただのおっさん化するのも時間の問題でした・・・（ホロリ

そんな感じで次話にてゆる～く最終話を迎えます。

最終話“お姫様大作戦”・・・お楽しみに♪

12・お姫様大作戦

率直に言えば、エルはまさにルカ姫瓜二つだった。

「ひ、姫様が二人……！？　もしや、本当にザレア殿は、ルカ姫ではなかったのか……！？」

と言うゲルトスの狼狽^{ろうはい}っぷりからも、それがどれ程のものか窺い知れる。

取り敢えずベルはゲルトスに、どこまで説明しようか悩んだ末、男だと言う事は伏せ、エルが自分の妹だと虚偽の説明を行った。

「何と！！　ベル殿の令妹^{れいまい}であらせられたか……　ううむ、それにしてもルカ姫様と瓜二つと言わざるを得んな……　本当にご姉妹であるのか？」

「ちよつと、それどーゆー意味よ？　幾らあんだでも殴るわよ？」

「あの……　お姉様？　そのダンディなおじ様はどちら様ですの……？　——まさかつ、フォアン様と言う方がありません——　ツ！？」

エルが驚愕に目を剥く。

「あんたはあんだで何を妄想してんのよツ！？　……えーつとね、」

エルにも先程コニカ達に説明した事を繰り返し告げると、エルは「なるほど……」と小さな顎を摘まむように指を添える。

「それで、わたくしがお姫様に瓜二つと……　それで替え玉を探していると……。……ん？　それって……」

エルが恐る恐ると言った様子でベルに視線を向けると、彼女は確^{しつ}りと頷いて応ずる。

「あんた、パルトー王国でお姫様やってみる気、無い？」

「ふあぶりやふおあつぺふあ——　ツツ！？　わわつ、わたくしがお姫様に……！？」

気が動転して「あわわあわわつ」と慌てふためくエルの手を握り締め、ゲルトスが真剣な面持ちで声を掛ける。

「エル殿、急な話で申し訳ないが、どうかこの申し出、受けては下

さらぬか……？ そなた程、姫様に似つかわしい女子は俗世を遍く
探しても見つかりはせぬ。どうか、どうかこの通りである……」

恭しく頭を垂れるゲルトスに、エルの瞳が一瞬ハート型になり、
頬が紅潮したかと思えば、口唇が震え始めた。ベルはいつもどおり
嫌な予感がしたが、今回も口を出す気は起きなかった。

「げ、ゲルトス様がそこまで仰るなら……。——で、でもつ、わた
くしにはフォアン様と言う心に決めた方が——」

そうやって無理矢理首をフォアンの方に捻じ曲げると、彼は人当
たりの良さそうな微笑を浮かべて、彼女の視線に応えた。

「エルがお姫様になった姿を、見てみたい気もするな」

「ゲルトス様、その申し出、心よりお受け致しますわー！！ さあ、
わたくしにお姫様になるための教えを説いて下さいまし！！」

「おお！！ 心より感謝致す！！ これで我国は、パルトー王国は
安泰である……！！」

そんな感じで話はトントン拍子に進み、エルは何のためにラウト
村に来たのかも分からないまま、ラウト村を去って行った。

「……あんた、女を誑かすの巧いわよね……」

ジト目でフォアンを見やるベル。フォアンは「はて？ 何の事か
な？」と惚けるように小首を傾げる。これが天然なら、生粋きっすいの女誑
しと言つても過言ではあるまい。

「……まあ、いいけどね。——つて、いたたた……何か安心したら、
全身の痛みが増してきたような……」

「当然にや！ 何せ丸三日以上、ずっと昏睡状態だったんだからに
や！」

ザレアがそう喚いた瞬間、ベルの時間が凍結した。

「……三日？ 三日もあたし、眠りっ放しだったの……？」

「そうなんですようっ、だからわたし、心配で心配で……っ」

涙をえぐえぐと流しながら訴える村長を見て、慌ててベルは彼女を慰めるために鮮やかな紅い髪を撫でてやる。

「あゝ……そうなんだ、あたし三日も寝てたんだ……」

…… どんだけボツコボコにされたんだ、あたし達……

どこか遠い目をしてフォアンに視線を向けると、彼も苦笑を禁じ得ない様子で腕を組んでいた。

「もしかして、地味に生死の境を彷徨ってたのか、俺達？」

「でも大丈夫にや！ オイラがアイルー秘伝の薬を何度と無く飲ませたからにや！ そのために、オイラはアイルーの皆に料金の代わりに大タル爆弾Gを支払ったのにやけれど、ベルさんもフォアン君も目覚めたから全然気にしないのにや！」

「ああ……それで大タル爆弾Gが村中から姿を消したのか……」

タネが分かり、ホツと胸を撫で下ろすベル。……ザレアが自分の命の源である爆弾を全て売り払ってでも助けてくれた事に、感謝をしても尽きないと思ったが、ザレアはその心を読み取ったように突然、首を否と振り始めた。

「ベルさんも、フォアン君も、オイラを助けてくれたにや！ だから、これでお相子なのにな！」

「ザレア……。うん、そうね。そういう事にしとくかつ。……でも、ありがとね、ザレアっ」

ベルの顔に浮かんだ笑みは、晴れ渡る青空を思わせる澄み渡った会心の笑みだった――

後日。森丘の間引きや、特産品の納品を終えて村に帰って来ると、丁度村の入口に、こんな辺鄙な場所^{へんぴ}にまで足を運んでくれる奇特定行商人――ウエズの姿があった。

「あら、ウエズじゃない。怪力の種でも買い取りに来てくれたの？」
「それどころじゃないよっ、これ見てくれよベル！！」

慌てた様子のウェズの手には、新聞紙が握り締められていた。

その新聞の一面をウェブはこれ見よがしに見せてきた。

「何よ一体……どれどれ、——ああ、」

「ああ、って、これどう見てもお前の妹のエルちゃんだろ！？　初めて見た時は気づかなかったけど、どう見てもエルちゃんだよね！？」

？　いつの間にお姫様になっちゃったんだよ！」

記事を改めて読んでみると、小国であるパルトー王国の暴動騒ぎが収束に向かい、徐々に軌道に乗り始めている、と書いてあった。お姫様効果がどれ程のものかと、ゲルトスの話に半信半疑だったべルだが、なるほどここまで凄いのかと思わずにいられたかった。

ベルがにやけるように口唇を歪めたのを見て、ウェズは更に不審そうに眉根を寄せる。

「ああ、あんたはあの時いなかったもんね。まあ、立ち話も何だし、酒場で話しようよ」

「まあ、エルちゃん、お姉さんに似て、確りしてるんですねえ」
丁度酒場に居合わせた村長——コニカにエルの話を見ると、彼女は我が子の事のように手を合わせて喜んだ。ベルも思わず笑みを零してしまふ。

「なるほどなあ、ルカ姫は不在だから、替え玉としてエルちゃんが姫様に成り代わったのかあ……。あーあ、そしたら僕、惜しい事したなあ……」

ちえつ、と指を鳴らしながら舌を打つウエズ。ベルは「何が惜しいのよ？」と何気無く尋ねる。

「そりゃあ、姫様になる前に口説いていれば、今頃僕は王子様だったんだぜ？ 逆玉の輿に乗るって奴さ。あゝあ、惜しい事したなあ……」

いや、性別上、それは不可能だろう、とツツコもうかと思つたが、ベルは敢えて「ああそう」と冷たくあしらうだけに留めた。彼にはもう暫く、夢を見させてやろうと考え直したのだ。

「あ、そういうえばベルさん。アネさんがベルさんの弓の事でお話があるって言つてましたけど……。聞いてませんか？」

コニカが両手に握り締めたハチミツ入りの牛乳を飲み干すと、ベルを見つめてそんな事を呟いた。ベルは勿論、身に覚えが無い事だった。

「うんにゃ、今、初めて聞いたけど……。何かあつたのかな？」

「さあ……。ベルさんに直接話がしたいって事でしたけど……」

コニカも小首を傾げるだけで、結局平行線だった。ベルは席を立ち、「それじゃ、ちよつと話を聞いてくるよ」と言つて酒場を後にする。

アネの武具屋まで歩いて五分もしないので、すぐに辿り着く。工房へ向けて「アネさゝんっ、お話つて何ですかゝっ」と大声を掛けると、「ああゝんっ、今行くわあゝんっ」と野太い猫撫で声が響いてきた。

ずしんっずしんっ、と大地を鳴動させながらスキップで現れた、

屈強な戦士然とした鋼の肉体をメイド服に納めた大男——アネは、いつもの化粧し尽くされた顔を少し曇らせて、ベルを見つめる。

「この間の件なんだけどお、ベルちゃん、ハートショットボウワンの方が、カジキ弓【姿造】よりも威力があるように感じたって、言ってたじゃない？ それであちし、カジキ弓【姿造】を調査したいって借りてたじゃない？」

「うん。それで何か分かったの？」

「あのね……とっても言い難い事なんだけど……カジキ弓、あれ、偽装強化されてたわあん」

「——偽装強化？ ……って言うの？」

「あのカジキ弓、本当は【姿造】じゃなくて、——まだ【粗】なのよ」

カジキ弓【姿造】と言えば、カジキ弓の最終形態と言うべき弓だが、カジキ【粗】は一番初めに造るカジキ弓であって、攻撃力はかなり落ちる——それこそ、ハートショットボウワンに遥かに劣る程に。

「——はいいい！？ え！？ それって……！？」

「——詐欺だな」

背後から声を掛けられ驚いて振り返ると、そこにはフォアンとザレアが立っていた。

「ベルさんを騙すなんて……許せないにや！！」

「全くだ。ベル、その弓を強化した職人を教えてくれ。今すぐぶつた切ってくるから」

「殺人だからね！？ 職人はモンスターじゃないからね！？ 気持ち嬉しいけど、実行には移さないでね！？」

慌ててツツコミと言う名の制止を図るベル。彼ならやりかねないと思っているベルの制止の声は必死だった。

「あちしが強化してあげたい所なんだけど、素材が足りないから無理なのよあん……ごめんねえ？ ベルちゃん……」

「……まあ、騙されたあたしも悪いし、気にしない事にするよっ。

……そうか、騙したのか、あのおっさん……！！　この借り、晴らさずしてなるものか……！！」

ベルの恐ろしげな呟きが漏れたのは、麗らかな陽射しの差し込む或る日だった。

更に後日。

ラウト村にウエズが現れ、彼から手紙が渡された。

「エルちゃんからだよ、パルトー王国に立ち寄って見たら、宮殿に通されちゃってさ。いやあ、ビックリしたね！　エルちゃん、もう可愛くて可愛くて……はあ、あんな可愛い子が誰かに嫁いじゃうなんて、僕には許せないね！」

と言うウエズの話は殆ど無視して、自分に宛てられた手紙を開いてみるベル。差出人は勿論、エルだった。

『親愛なるお姉様へ

あれからもう二ヶ月になりますが、お変わりありませんか？

わたくしはお姫様生活にも慣れ、毎日楽しく生活しています。

ゲルトス様には本当に良くして貰っていて、フォアン様には申し訳ありませんが、わたくし、彼と新しい恋を始めてみようかな？

なんて思ったりしています。えへへ♪

あと、わたくしの秘密はまだ誰にも知られていないようで、湯浴みの時とか、着替えの時とか、色々気をつけながらの生活が続いています。これが実は物凄く大変なのですが、ゲルトス様の事を思えば、全然苦じゃありません！　あ、フォアン様の事もちゃんと考えてますよ？

国も軌道に乗り、情勢も安定し、毎日平和を享受していますが、獵人の頃の生活が身に染みているためか、日々の生活が物足りないようにも感じます。

でも、ゲルトス様がいつも顔を見せに来てくれるので、あまり不

満を感じなくなってきました！

わたくし、今度は恋の獵人として狩獵を行っていかうかなって思ってます！

それではフォアン様に宜しくお伝え下さい。

エルより』

「……まあ、相変わらずな感じね……」

呆れたように嘆息するベルに、フォアンとザレアも微笑を浮かべる。

「今度、皆で逢いに行ってみようぜ？ エルのお姫様姿も気になるし」

「フォアンもそう思うだろう？ いやあ、ベルの妹とは思えないほど可愛かったからなあ……こりゃ、本気で逆玉の輿を狙うしかないかなあ」

「ほう？ 何か言ったかなウエズ君？ ——あのねコニカさん、この腐れ行商人ね、昔——」

「わーわーっ！！ エルちゃんのお姉さんだもんねっ、ベルはとっても可愛いなあ、なっ？ フォアンもそう思うだろう？ だろお？」

「ベルさんはカッコいいのにや！ にゃねっ、フォアン君っ？」

「うゝむ、ベルはモテモテだな。羨ましい限りだぜ」

「……何か複雑な気分だけれど、まあいいわよ。——さっ、怪力の種をばっちり買い取って貰いましょうか？」

——そうして今日もラウト村には痛ましげな悲鳴が木霊するのだった。

12・お姫様大作戦（後書き）

これにて【ベルの狩猟日記4】は完結です。

ここまでお読み頂き、誠に感謝致します！

また、ご感想、ご意見、ご指摘の程、宜しくお願い致します！（・

ー・）ー

因みにシリーズ続編である【ベルの狩猟日記5】に関しましては、
現在プロットさえ組み上がっていない状態でして、もし公開すると
しても、随分と時間が掛かるかと思えます。なので、気長にお待ち
頂けたらと思います。

それでは、またいつの日か再会できる事を祈りつつ、これにて筆を
擱かせて頂きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8284f/>

ベルの狩猟日記 4

2010年10月8日13時00分発行